

笛吹市文化財調査報告書 第1集

山梨県笛吹市

# 夜 長 遺 跡

笛吹市道八代57号線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

笛吹市教育委員会

## 序

笛吹市は、東八代郡下の石和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村と東山梨郡下の春日居町の6町村が合併して平成16年10月12日に誕生した。この報告書は、合併前に八代町教育委員会が実施した町道57号線（現在の笛吹市道八代57号線）の建設工事に伴う夜長遺跡発掘調査の報告書である。

今回の発掘調査は、道路の建設用地が夜長遺跡内を通過することから試掘調査が行われ、豊穴住居跡らしい掘り込みが確認されたり、平安時代の遺物が出土した約600m<sup>2</sup>の範囲を対象に、平成12年10月4日から約3ヶ月にわたって行われたものである。その結果、住居跡10軒、上坑5基、溝状遺構1条が検出され、遺物も整理箱にして10箱分が出土するなど多くの成果を得ることができた。

夜長遺跡の所在地は、笛吹市八代町米倉地内で、標高320m前後の浅川左岸の扇状地南西縁に位置している。周辺には大仏塚遺跡・花山遺跡・金山遺跡があり、大仏塚古墳も所在している。また、本遺跡の西側には米倉C条里制造構として確認されている条里型地割が広がっている。しかし、これらの遺跡が所在する浅川左岸の扇状地南西縁の様相については不明な点が多く、今回の発掘調査が、当地域の歴史解明の一端になればと考えている。

おわりに、発掘調査から本書の刊行に至るまでご指導・ご協力をいただいた関係機関、先学の諸氏をはじめ、作業に携わっていただいた皆様に敬意を表します。

平成17年3月

笛吹市教育委員会

教育長 芦原正純

## 例　　言

1. 本書は平成 12 年度に行われた山梨県東八代郡八代町米倉地内に所在する夜長遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は町道 57 号線建設工事に先立ち行われた。
3. 発掘調査は八代町教育委員会が実施した。
4. 発掘調査は平成 12 年 10 月 4 日より、同年 12 月 27 日まで行った。
5. 本報告書の執筆・編集・写真撮影は小坂規恵が行った。
6. 本遺跡の発掘調査では空中写真撮影・調査区全体図作成の一部については（株）フジテクノに委託した。
7. 発掘調査から報告書作成に至るまで、次の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。  
猪股喜彦、岡野秀典、小瀬忠秋、瀬田正明、野崎進、林部光、望月和幸、森原明廣  
山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター（順不同・敬称略）
8. 本書における出土品および記録図面・写真等は笛吹市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査組織は次のとおりである。

調査事務局 霜村純志（八代町教育委員会教育長）

石原明雄（八代町教育委員会社会教育課課長）～平成 13 年 3 月 31 日

宮澤和道（八代町教育委員会社会教育課課長）平成 13 年 4 月 1 日～平成 14 年 3 月 31 日

河野 修（八代町教育委員会社会教育課課長）平成 14 年 4 月 1 日～平成 16 年 10 月 11 日

伊藤修二（八代町教育委員会社会教育課文化財係係長）

調査担当者 小坂規恵（八代町教育委員会社会教育課埋蔵文化財主任調査員）

発掘調査・室内整理参加者

石倉弘子・梶原幸子・河西久美子・齐木愛子・青間千津子・高野慎寿美・中辻けん三・

中込 樹・中山拓生・藤原さつき・村松久美子・矢野美鈴・渡辺あけみ

10. 山梨県東八代郡八代町は平成 16 年 10 月 12 日に周辺の町村との合併により笛吹市となった。本書の原稿は合併直前に仕上がったため、印刷製本は笛吹市となってから行われた。このことから、出版は笛吹市教育委員会となっているが、内容は東八代郡八代町のものとなっている。

## 凡　　例

1. 遺構の挿図中の斑点は焼土跡をあらわす。
2. 遺物の挿図中断面が黒塗りは須恵器、斑点は灰釉・綠釉陶器で、それ以外の土器類は白抜きである。また、土師器器面の斑点は黒色処理面をあらわす。
3. 表の大きさの（ ）は現存値、〔 〕は推定値をあらわす。

## 目 次

序文、例言・凡例、日次、挿図目次、図版目次

第Ⅰ章	調査の経緯と概要	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	
第1節	位置と地理的環境	2
第2節	歴史的環境	3
第Ⅲ章	調査の方法と層序	6
第Ⅳ章	遺構と遺物	
第1節	縄文時代の遺構	
1	上坑	8
第2節	平安時代の遺構	
1	堅穴住居跡	8
2	土坑	24
第3節	時期不明の遺構	
1	上坑	25
2	溝状遺構	25
第4節	遺構外出土遺物	26
第Ⅴ章	まとめ	31

## 挿図目次

第 1 図 遺跡位置図 ..... 1	第 13 図 4 号住居跡出土遺物 ..... 9	第 25 図 10 号住居跡出土遺物 ..... 16
第 2 図 試掘トレンチ設定図 ..... 2	第 14 図 5 号住居跡 ..... 10	第 26 図 11 号住居跡 ..... 17
第 3 図 調査範囲図 ..... 3	第 15 図 5 号住居跡出土遺物 (1) ..... 10	第 27 図 11 号住居跡出土遺物 ..... 17
第 4 図 周辺遺跡分布図 ..... 4	第 16 図 5 号住居跡出土遺物 (2) ..... 11	第 28 図 13 号住居跡 ..... 18
第 5 図 グリット設定図 ..... 6	第 17 図 6 号住居跡 ..... 11	第 29 図 13 号住居跡出土遺物 ..... 18
第 6 図 調査区全体図 ..... 7	第 18 図 6 号住居跡出土遺物 ..... 12	第 30 図 土坑 (平安時代) ..... 24
第 7 図 2 号土坑 ..... 8	第 19 図 7 号住居跡 ..... 12	第 31 図 土坑出土遺物 (平安時代) ..... 24
第 8 図 2 号土坑出土遺物 ..... 8	第 20 図 7 号住居跡出土遺物 (1) ..... 13	第 32 図 土坑 (時期不明) ..... 25
第 9 図 2・3 号住居跡 ..... 8	第 21 図 7 号住居跡出土遺物 (2) ..... 14	第 33 図 1 号溝状造構 ..... 26
第 10 図 2 号住居跡出土遺物 ..... 9	第 22 図 8 号住居跡 ..... 14	第 34 図 造構外出土遺物 (1) ..... 26
第 11 図 3 号住居跡出土遺物 ..... 9	第 23 図 8 号住居跡出土遺物 ..... 15	第 35 図 造構外出土遺物 (2) ..... 27
第 12 図 4 号住居跡 ..... 9	第 24 図 10 号住居跡 ..... 15	第 36 図 造構外出土遺物 (3) ..... 28

## 図版目次

図版 1 進跡全景 (南より)	7 号住居跡カマド断面	13 号住居跡出土遺物
調査区全景	図版 3 7 号住居跡出土遺物 (1)	1 号土坑
3 号住居跡	7 号住居跡出土遺物 (2)	3 号土坑
4 号住居跡	8 号住居跡	4 号土坑
図版 2 5 号住居跡	8 号住居跡カマド	1 号溝状造構
5 号住居跡カマド (1)	10 号住居跡	調査風景
5 号住居跡カマド (2)	10 号住居跡出土遺物	図版 5 平安時代出土遺物 (1)
6 号住居跡	11 号住居跡	図版 6 平安時代出土遺物 (2)
6 号住居跡カマド	11 号住居跡カマド	図版 7 平安時代出土遺物 (3)
7 号住居跡	13 号住居跡	
7 号住居跡カマド	13 号住居跡カマド	

## 表目次

第 1 表 2 号住居跡遺物観察表 ..... 19	第 8 表 10 号住居跡遺物観察表 ..... 22	第 15 表 造構外出土遺物観察表 (縦文時代) ..... 28
第 2 表 3 号住居跡遺物観察表 ..... 19	第 9 表 11 号住居跡遺物観察表 ..... 23	第 16 表 造構外出土遺物観察表 (平安時代) ..... 29
第 3 表 4 号住居跡遺物観察表 ..... 19	第 10 表 13 号住居跡遺物観察表 ..... 23	第 17 表 造構外出土遺物観察表 (中世) ..... 30
第 4 表 5 号住居跡遺物観察表 ..... 19	第 11 表 土坑一覧表 (平安時代) ..... 25	第 18 表 造構外出土遺物観察表 (鉄製品) ..... 31
第 5 表 6 号住居跡遺物観察表 ..... 20	第 12 表 1 号土坑遺物観察表 ..... 25	
第 6 表 7 号住居跡遺物観察表 ..... 20	第 13 表 4 号土坑遺物観察表 ..... 25	
第 7 表 8 号住居跡遺物観察表 ..... 22	第 14 表 上坑一覧表 (時期不明) ..... 25	

## 第Ⅰ章 調査の経緯と概要

八代町は昔から遺跡が多いところとして知られており、平成元年に行われた分布調査でも 216 の遺跡が確認されている。そのため、近年さまざまな開発工事に伴う遺跡の発掘調査が行われている。

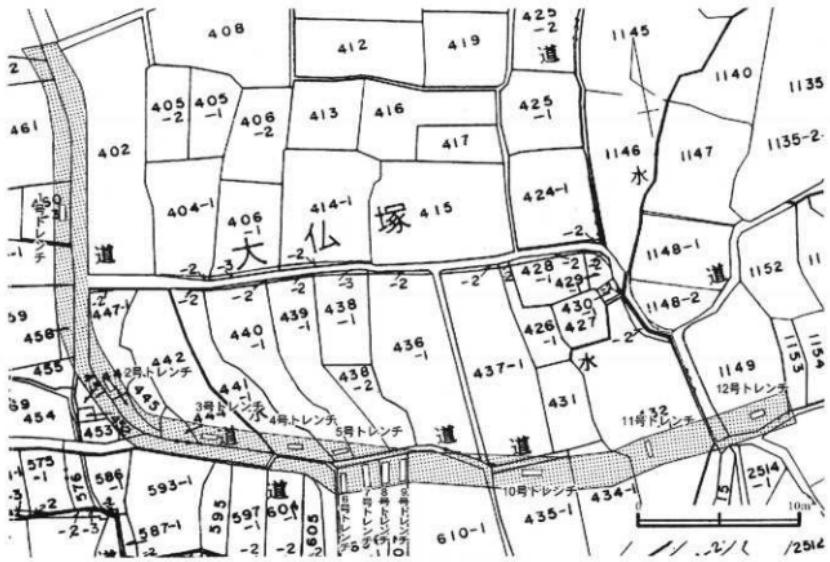
今回の発掘調査は事業主体者である八代町が米倉地内において、町道 57 号線の建設工事を計画し、町教育委員会に埋蔵文化財の有無について所在の照会を行ってきた。町教育委員会では遺跡地図との照合を行った結果、周知の埋蔵文化財包蔵地『夜長遺跡』内に位置しており、現地踏査でも平安時代を中心とした遺物の散布が認められた。そのため、文化庁および山梨県から補助金を受け、計画予定地内の埋蔵文化財の有無を確認するために、平成 12 年 7 月 27 日から 8 月 18 日までの 13 日間かけ試掘調査を実施した。

その結果、住居跡らしい遺構の掘り込みや平安時代の遺物などが出土したことから、計画予定地内における埋蔵文化財の存在が明らかとなった。山梨県教育委員会学術文化財課・八代町とで協議を行い、道路建設予定地内のうち遺構が確認された約 600 m を対象に記録保存のための発掘調査を行うことにした。

平成 12 年 10 月 4 日から 12 月 27 日までの約 3 ヶ月間にわたり発掘調査を実施した。これにより、平安時代の住居跡 10 軒、土坑 5 基、溝 1 条が検出された。その後、引き続き遺物などの整理作業を行い、平成 17 年 3 月に報告書を刊行するに至る。



第1図 遺跡位置図 (S=1 : 50,000)



## 第II章 遺跡の位置と環境

## 第1節 位置與地理的環境

山梨県東八代郡八代町は甲府盆地の南東部に位置しており、北は笛吹川をはさんで石和町があり、東には天川および花鳥山から矢高山の稜線を境にして御坂町がある。南には鳥坂峠を境にして芦川村、西は浅川下流とその支流である童安寺川および大谷山から稻山の稜線を境にして境川村にそれぞれ隣接している。

町の総面積は 25.33 km<sup>2</sup>あり、浅川によって形成された扇状地上に発達した町である。浅川は御坂山塊中央部の大口山にその源流をもち、甲府盆地にむかって北西ないし西北西に流れ笛吹川にそそぐ、全長約 12 km ほどの川である。かつては洪水のたびに流路を変えっていたが、現在では扇状地の西側を流れている。

地形的には御坂山塊北斜面の山地と丘陵、崖錐地城、浅川の扇状地、笛吹川の沖積地から成り立っている。山地は標高500～1400mの地帯で、町の約半分をしめ、主に南東部に広がっている。丘陵は浅川右岸には奈良原の東側から花鳥山にかけて標高500～560mの狭い範囲に広がり、左岸には上ノ原・上ノ平にかけて標高380～440mのなだらかで広い丘陵がみられ、これらは西方にのび曾根丘陵に連なっている。

本遺跡が立地する浅川扇状地は御坂町の金川扇状地とともに甲府盆地に開く扇状地群の中でも最も発達したものの一つである。この扇状地は山地から丘陵に移る本町竹居門林付近を扇頂として、甲府盆地のある北西方向にむかって約70度に開く扁型をしている。面積は約8km<sup>2</sup>ほどで、町のほぼ1/3を占める。傾斜は平均2~3度あり、その扇端は北・南・水井・米倉地域の北西側に小さな急斜面の状態を残している。また、この扇状地には浅川の流路の変化に伴い、さらに細かく何段階も形成された状態がみられる。



第3図 調査範囲図 (S=1:2,500)

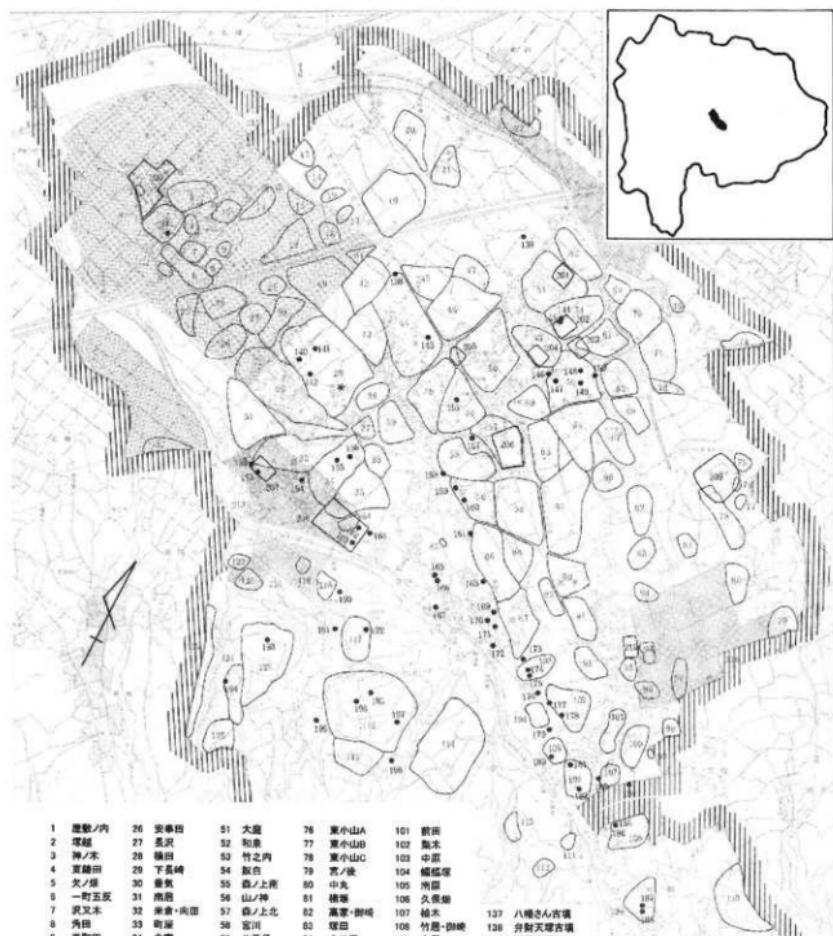
沖積地は新浜・大間田・増田付近の低湿地地帯で、かつては笛吹川の氾濫原であった地域である。標高は255～280mで、笛吹川の河床とほぼ同じ高さである。氾濫により流された遺跡も多く、現状では確認できていないものもあるが、かつては扇状地と同じく多数の遺跡が分布していたものと思われる。

夜長遺跡は八代町米倉地内に所在し、浅川の左岸の扇状地南西縁に位置する。調査区西端から約150m北には東⇒西方向に浅川が流れ、その対岸に浅川中学校がある。東端約250m東には八幡神社がある。南西側にある上ノ平丘陵と南東側にある上ノ原丘陵の谷間に大谷沢川が流れ、150m南にはその灌漑用の溜池があり、それに隣接するように中尾神社の祠が奉られている。西へ約300mには竜安寺があり、さらに200mほど行くと境川村前間田に至る。やや傾斜面上にあり、標高は320m前後である。遺跡は東西約100m、南北約120mの範囲に広がり、今回調査したのはそのなかの東側部分にあたる。

## 第2節 歴史的環境

八代町内には先の遺跡分布調査において、216の遺跡の存在が確認された。これらは山地を除く町内のほぼ全域に広がっており、時期的に分布の粗密がみられるが、旧石器時代から近世と多岐にわたり、中でも绳文時代前期～平安時代の遺跡が多く、主に丘陵や浅川扇状地上に集中して分布している。このことは古くから生活場所として利用されていたことを示している。

本遺跡の周辺にも遺跡が多く存在している。遺跡の位置する浅川左岸には八幡遺跡(117)・大仏塚遺跡(119)・花田遺跡(120)・金山遺跡(121)などがある。古墳では遺跡の東隣に大仏塚古墳(190)、八幡遺跡内にある鳩峰古墳(191)などが点在している。また、遺跡西側に一部かかるように米倉C条里制度構があったことが確認されている。その北側の浅川右岸には町屋遺跡(33)・今宮遺跡(34)・天神原遺跡(35)・土井原遺跡(84)・沢添遺跡(85)などがある。また、町屋遺跡の南西部に近世の米倉氏館跡(207)があったとされ、天神原遺跡と土井原遺跡にかけては中世の米倉氏館跡(208)があったといわ



1 運動場/内	26 安春田	51 大庭	76 東小山田	101 斎浜	137 八幡さん古墳	160 佐子塚古墳	194 真土塚古墳
2 墓越	27 墓沢	52 竹之内	77 西小山田	102 町木	138 分財天塚古墳	161 石塚古墳	195 五郎塚古墳
3 神/木	28 稲田	53 竹之内	78 西小山田	103 中原	139 鳩塚古墳	162 佐子塚古墳	196 朝子塚古墳
4 荒神田	29 下長崎	54 故台	79 芝/北	104 桶塚古墳	140 梶塚(丘塚)古墳	163 梶塚古墳	197 武田宿守下屋跡
5 欠ノ原	30 備氣	55 西之庄	80 中丸	105 南原	142 佐良古墳	164 石塚古墳	198 鹿の子塚古墳
6 一町五反	31 南原	56 山ノ井	81 植原	106 久須瀬	143 佐良古墳	165 梶塚古墳	199 鹿の子塚古墳
7 沢又木	32 麻糸田	57 西之庄北	82 高原・附城	107 柿木	144 佐成今宿古墳	166 平度古塚	200 鹿の子塚古墳
8 角田	33 新屋	58 宮川	83 梶原	108 竹原・御坂	145 伊守塚古墳	174 梶塚第一号塚	201 武田宿守下屋跡
9 春田町	34 今宮	59 八王子	84 土井原	109 土原	147 伊勢塚古墳	175 梶塚第二号塚	202 佐成今宿
10 上反田	35 天神原	60 伊豆之宮	85 沢添	110 花畠山	148 佐麻塚古墳	176 鳩塚古墳	203 佐白鹿敷跡
11 穴田	36 穴之後	61 上の下	86 北原	111 深沢洋上	149 真麻子塚古墳	177 おこり塚古墳	204 佐野氏新敷跡
12 棚田	37 長瀬亭	62 久須A	87 間ノ村上	112 朝沢平	151 京子塚古墳	182 おこり塚古墳	205 下新田屋敷跡
13 果田	38 下原	63 下神之木	88 間ノ村上	113 次沢	152 旗塚古墳	183 旗塚古墳	206 浜人屋敷跡
14 蓬甲B	39 内原	64 上神之木	89 流見原	114 大曾根林	153 旗塚古墳	184 街端二号塚	207 末食氏新敷跡
15 宮田	40 横舟	65 金地蔵	90 大久保	115 須山原	155 駒塚古墳	185 八幡塚古墳	208 末食氏新敷跡
16 蓬甲A	41 篠田	66 梶原林	91 清水	116 須子原	156 旗塚古墳	190 大山塚古墳	209 小山城址
17 沢田	42 井戸丈	67 球川	92 巴中畠	117 八幡	157 地蔵塚古墳	191 堀塚古墳	210 真家三重屋敷跡
18 芦川田	43 長崎	68 久須B	93 草薙田	118 夜長	159 山神塚古墳	193 乾塚古墳	* 駒ヶ寺
19 丹波津	44 五重原	69 下の下	94 法花田	119 大塙	160 月見塚古墳		
20 鶴羽	45 真道澤	70 芝草	95 八反田	120 芝田	161 鶴塚古墳		
21 三原沢	46 便ノ下	71 大堀	96 八反田	121 金山	162 鶴塚古墳		
22 北・舟田	47 神田	72 川旁塚	97 一町田	122 菊阳寺川西	163 鶴塚古墳		
23 植田	48 庭	73 梶毛	98 梶原	123 上ノ平田	164 鶴塚古墳		
24 下長沢	49 二子塚	74 極斗	99 青木田	124 上ノ平田	165 鶴塚古墳		
25 真見塚	50 塚/内	75 丸山	100 佐藤	125 大沢沢A	166 鶴塚古墳		

第4図 周辺遺跡分布図 (S=1 : 25,000)

\* スクリーンショット部分は条里町境線の範囲

れている。古墳では米倉氏館跡（207）内に雌蝶塚古墳（152）や雄蝶塚古墳（153）があり、米倉氏館跡（208）内には無名古墳（162）、無名古墳（163）、石塚古墳（164）がある。また、550 mほど北東に堀廻塚古墳（165）、無名古墳（166）、無名古墳（167）などが点在している。

本遺跡の南側には丘陵地帯が広がり、浅川へとそそぐ川によってその間が開析されている。東の四ッ沢川と西の大谷沢川とに挟まれた丘陵上には銚子原遺跡（116）・稻山遺跡（115）があり、そこに益塚古墳（195）、銚子塚古墳（196）、無名古墳（197）などが点在している。また、その東隣に大谷沢川と西の竜安寺川に挟まれた丘陵上には上ノ平A遺跡（123）があり、竜塚古墳（193）も分布している。

本遺跡からは平安時代の住居跡が確認されたが、町内にも同時代の遺跡が数多く存在し、扇状地上には全域に広がっている。同時期の遺構が確認された遺跡としては下長崎遺跡（29）・五里原遺跡（44）・堀ノ内遺跡（50）・八王子遺跡（59）・金地藏遺跡（65）・堀川遺跡（67）・四反田遺跡・東小山B遺跡（77）・東小山C遺跡（78）・上ノ平A遺跡（123）などがある。

下長崎遺跡では1986年に「三光神遺跡」として約400 m<sup>2</sup>を調査し、そこから古墳時代のものとされる条里制地割りの道1条、時期不明の配石遺構などが検出されている。遺物は縄文土器（主に前期後葉・中期初頭～中葉）、石器・弥生土器・古墳時代前期・中期・後期の遺物などがあり、中でも5世紀後半のものが最も多く出土している。1987年には県教育委員会で約560 m<sup>2</sup>を調査し、そこから古墳時代後期の住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟・配石遺構2基・土坑4基、集石列1基、鍛冶遺構1基、奈良時代の住居跡3軒、平安時代の住居跡4軒、円形配石1基、列石6基、溝1条、集石13基、カマド4ヶ所などの遺構が確認された。2002年には町教育委員会により、農道整備拡幅工事のため約350 m<sup>2</sup>が調査され、縄文時代の溝状遺構1条、古墳時代後期の住居跡4軒、土坑2基、奈良時代の住居跡1軒、平安時代の住居跡13軒、土坑4基、溝状遺構1条が確認されている。

五里原遺跡では1983年には農道拡幅調査に伴い52 m<sup>2</sup>の面積に13本の試掘溝をいれる調査を行い、古墳時代後期の住居跡1軒とカマドの跡とされる焼土跡が2基、時期不明の配石と溝状遺構などが検出されている。各期の土器のほかに円筒上器2・手探土器・輪の羽口（古墳時代後期）・2片が融着した須恵器片などが出土している。1996年には試掘調査で住居跡らしき落ち込みが3箇所と確認され、古墳時代前期・後期の土器や平安時代の土師器・甕・柱状高台壺、灰釉陶器などの遺物が出土している。2001年には県道の歩道拡幅工事に伴い約270 m<sup>2</sup>が調査され、古墳時代前期の住居跡1軒、中期の住居跡1軒、後期の住居跡6軒、古墳時代の土坑2基、平安時代の住居跡1軒が確認されている。

堀ノ内遺跡では1988年に町教育委員会により町役場庁舎建設に際して面積1477 m<sup>2</sup>の調査が行われ、縄文時代中期の埋甕1基、古墳時代後期の住居跡16軒・奈良時代の住居跡7軒・平安時代の住居跡13軒、中近世の掘立柱建物跡1棟のほかに各時期に土坑・溝状遺構・ピットなどが確認されている。

八王子遺跡では1991年にスポーツ館建設に伴い調査が行われ、古墳時代後期の住居跡が3軒、奈良時代の住居跡3軒、平安時代の堅穴住居跡10軒、掘立柱建物跡1棟のほかに各期の土坑・溝状遺構が検出されている。また、遺物としては鉄製の鋸先なども出土している。

金地藏遺跡では2001年に住宅建設工事に伴い約300 m<sup>2</sup>の調査が行われ、縄文時代の落し穴状の土坑1基、古墳時代前期の住居跡1軒・土坑3基・奈良時代の住居跡1軒、平安時代の住居跡6軒・土坑3基・溝状遺構3条が確認されている。

堀川遺跡では1997年に住宅建設工事に伴い約206 m<sup>2</sup>の調査が行われ、奈良時代末の堅穴状遺構1軒、溝状遺構1条、平安時代初の住居跡2軒、平安時代末～中世の堅穴状遺構3軒が確認されている。

四反田遺跡・東小山B遺跡・東小山C遺跡では1999～2000年の一連の農道建設に伴う約2640 m<sup>2</sup>の調査が行われ、四反田遺跡では平安時代の住居跡4軒と弥生時代後期の土器・灰釉陶器・中世のかわらけや磁器などが確認されている。東小山B遺跡では縄文時代の土坑3基、奈良時代の住居跡3軒・土坑1基・溝状遺構1条、平安時代の住居跡3軒・土坑2基・溝状遺構3条、時期不明の大型掘立柱建物跡や多数のピット群が確認されている。また、東小山C遺跡では平安時代の溝状遺構2条が検出された。

上ノ平A遺跡では1984年に縄文時代中期の住居跡3軒、弥生時代後期の住居跡7軒、平安時代の可能性がある12基の土坑など他に各時期に土坑・溝状造構・ピットなどが確認されている。

今回本遺跡からは主に平安時代を中心とした集落跡が確認され、その周辺に大集落が存在していた可能性が十分考えられる。また、本遺跡に一部かかるように北側にひろがるとされる条里製造構との関係も生産遺構との関連からみると興味深い。しかし、現状では各時期ともに不明な点も多く、さらなる詳細については今後も調査が進んでいくことにより徐々に明らかとなるであろう。

### III章 調査の方法と層位

今回の発掘調査範囲は町道57号線建設工事に伴う幅約10m長さ約60mの道路部分で、面積は約600m<sup>2</sup>に及ぶ。試掘トレンチを全部で12本いれて調査を行い、そのうち10号トレンチから住居跡らしきカマドの状態が確認されたため、建設予定範囲の一部について調査を行った。

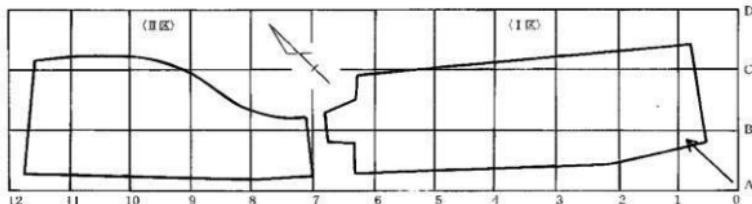
調査対象域はもともと畑の帶地に併せ3段のヒナ段に分かれていたため、便宜的に上段をI区、中段をII区として調査を行った。本遺跡は畑を造成する際、傾斜面各段の上部の土を削って下に積むことにより平坦面を構成していたと思われる。そのため、I区では0~3ライン、II区では7~9ラインにかけて遺構の確認面が耕作土直下にあるか、または削平されており、13号住居跡のように壁高がほとんどないものや、遺物が多く出土しているが、遺構の確認が難しい状態のものなどがみられた。

調査区には5m四方に杭をうちグリットを設定した。グリット番号は長さに対してはI区の最南端を起点に北西方向にむかって1から12までの算用数字で示し、幅に対してはA~Cのアルファベットを付し、Bラインを基本ラインとしている。

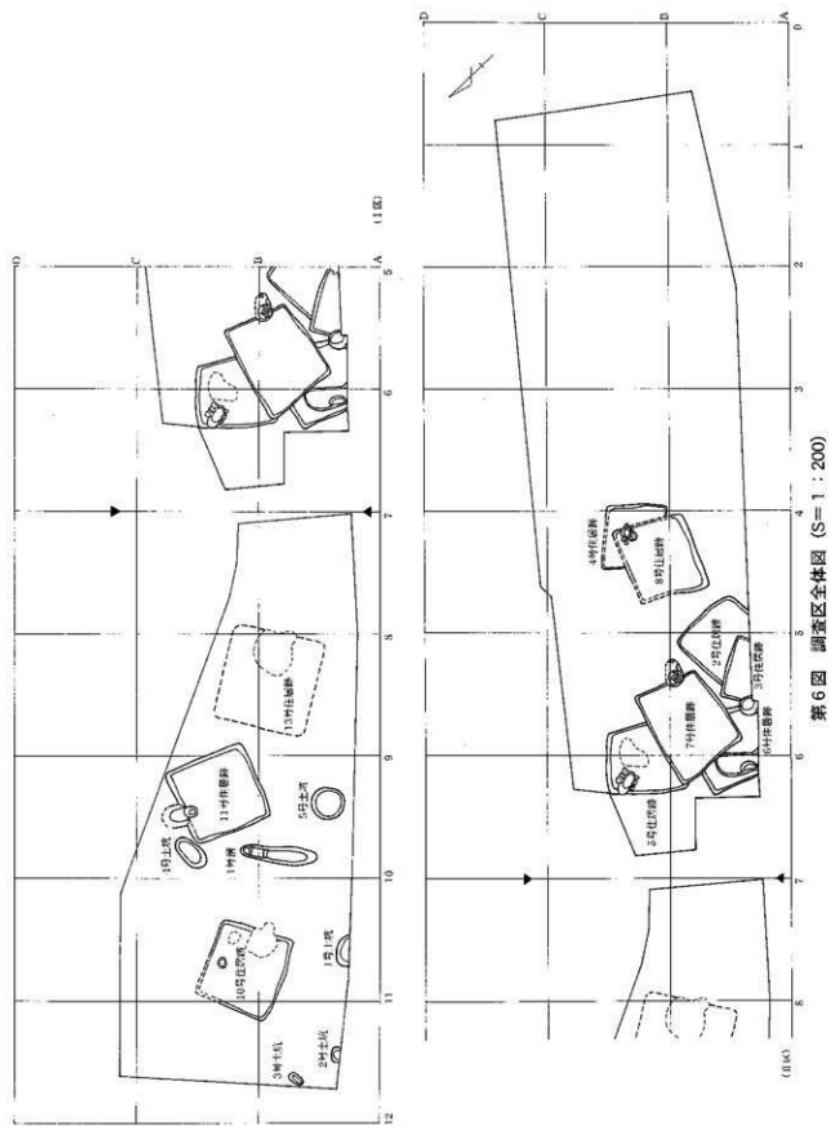
調査の方法としては、重機により表土層を廃土した後、遺構確認面を人力で精査して遺構の検出作業を行い、その後、各遺構の調査を行った。

本遺跡の基本層序は次に示す通りである。遺構確認面はⅢ層である。

I層	表土層（耕作土）
II a・II b層	茶褐色土（炭・赤色スコリアを少量含む）
III a層	茶褐色土（炭・赤色スコリアを多量に含み、白色粒子を少量含む）
III b層	茶褐色土（炭・赤色スコリアを微量に含む）
IV層	明茶褐色土（炭・赤色スコリアを少量含む）
V層	黒褐色土（赤色スコリアを微量に含む）



第5図 グリット設定図 (S=1:400)



第6図 調査区全体図 (S=1:200)

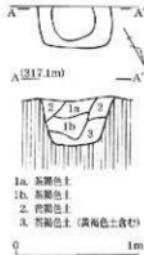
## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 繩文時代の遺構

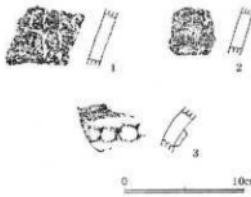
#### 1. 土坑

##### 2号土坑（第7・8図）

A - 12グリットに位置し、南側が一部調査区外にあるため確認されていない。平面形は方形を呈すると思われ、規模は東西60cm、南北が現状で約35cm、深さ35cmを測る。覆土はいずれも茶褐色土を主体とし、覆土中から縄文時代前期の土器が数点出土しており、他の時期の遺物が確認されていないことから、当時期に属するものと思われるが、詳細は不明である。



第7図 2号土坑



第8図 2号土坑出土遺物

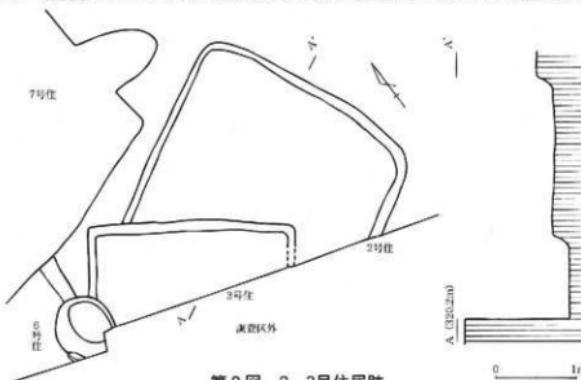
### 第2節 平安時代の遺構

#### 1. 積穴住居跡

##### 2号住居跡（第9・10図、図版5、第1表）

本住居跡はA-5～6グリットにかけて位置している。西側を3号住居跡に切られており、南側1/4が調査区外にかかった状態で確認された。

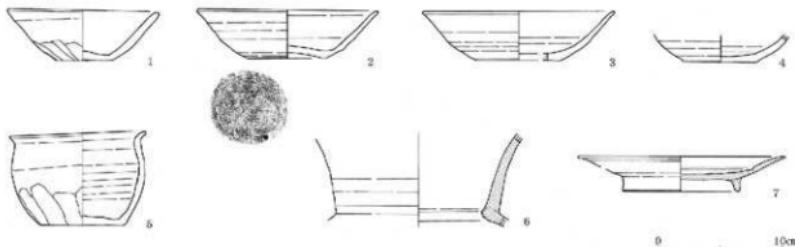
平面形は長方形を呈し、規模は南北3.0m、東西は現状2.5mある。壁は垂直に最大で25cmほど掘り込まれている。床はおおむね平坦な地山で、硬化した面はみられないが、比較的しっかりした状態である。カマドは確認されておらず、調査区外または3号住居跡に切られた可能性が考えられる。



第9図 2・3号住居跡

遺物の出土状況は南東部から土師器壺（1）と緑釉陶器の段皿（7）が、北壁中央から壺（2）がそれぞれ床面から出土している。

遺物は土師器壺（1～4）、小型甕（5）、灰釉陶器の長頸甕（6）、緑釉陶器の段皿（7）が出土している。緑釉陶器の段皿は漬け掛けによる全面施釉で、高台断面が台形を呈する。



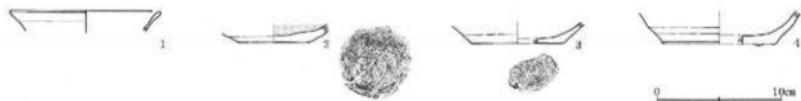
第10図 2号住居跡出土遺物

#### 3号住居跡（第9・11図、図版1、第2表）

本住居跡はA-6グリットに位置している。東側の2号住居跡と西側の6号住居跡を切ってつくられている。南側が調査区外にのびているため、全体の1/3しか確認できなかった。

平面形は方形を呈すると思われ、規模は東西2.8m、南北は現状で1.3mある。壁は垂直に最大で35cmほど掘り込まれている。床は地山で少し南にむかって傾斜しており、全体に軟弱で硬化した面は確認できなかった。カマドなどは検出されておらず、調査区外にある可能性が高い。

遺物はいずれも覆土中から土師器壊（1～3）、鉢（4）などが出土している。



第11図 3号住居跡出土遺物

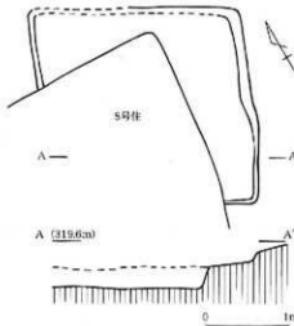
#### 4号住居跡（第12・13図、図版1・7、第3表）

本住居跡はB-4～5グリットにかけて位置している。8号住居跡によって切られており、北側にも大きな擾乱があり遺存状態はよくない。

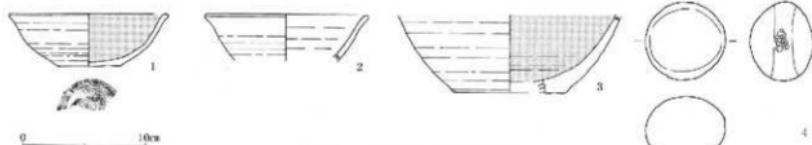
平面形は方形を呈し、規模は南北2.6m、東西2.6mある。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は浅く最大で15cmほどである。床は東から西にむかって緩やかに傾斜しており、全体的に軟弱で硬化した面は確認できなかった。

カマドは確認されておらず、8号住居跡に切られた可能性が考えられる。

遺物はいずれも覆土中から土師器壊（1・2）、鉢（3）・磨石（4）が出土している。



第12図 4号住居跡



第13図 4号住居跡出土遺物

### 5号住居跡（第14～16図、図版1・5、第4表）

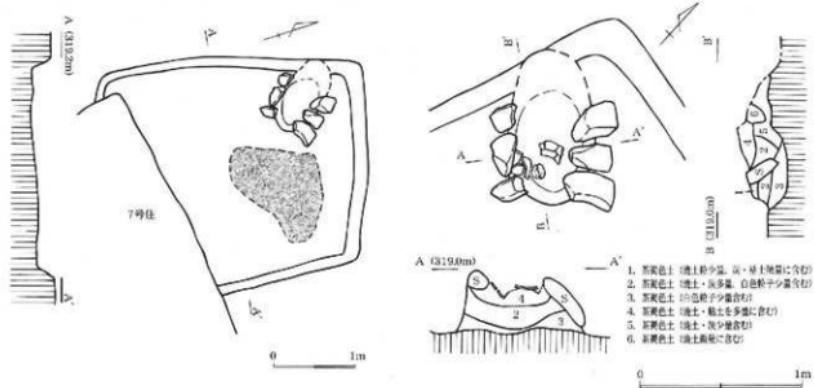
本住居跡はB-6～7グリットにかけて位置している。7号住居跡によって南側1/4が切られ、南東部にも大きな搅乱があり、カマド周辺と北東部だけしか残存しておらず、遺存状態はよくない。カマド前面の床面上から焼土がまとめて出土している火災住居である。

平面形は長方形を呈し、規模は南北推定3.5m、東西3.0mあり、主軸方位はN-75°-Wを指す。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は最大で25cmある。床にはカマド前面に焼土が厚く堆積した部分がみられ、その部分には硬い床面がみられたが、全体的には軟弱で、硬化した面は確認できなかった。

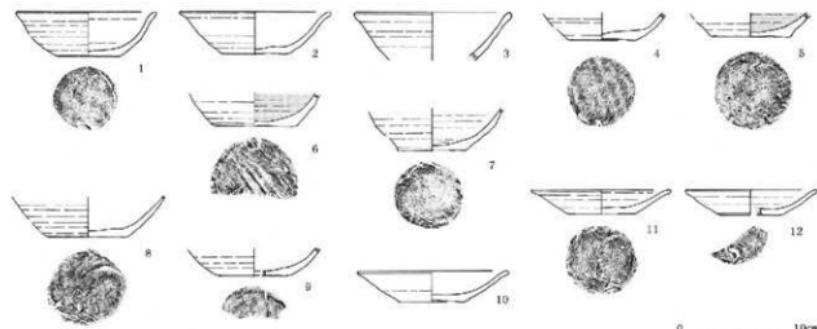
カマドは北東隅につくられている。全長約0.9m、幅約0.85mあり、両袖とも大きめの3つの石を並べた袖石が残存していた。燃焼部には深さ5cmほどの掘り込みがあるが、焼土の堆積はみられなかった。

遺物の出土状況はカマド前面焼土部分から土師器壺（2・8）が、中央から東壁にかけては壺（4・7）が、北壁中央やや東寄りから小型甕（14）がそれぞれ床面上から出土している。また、カマド内からは甕（15）が出土している。

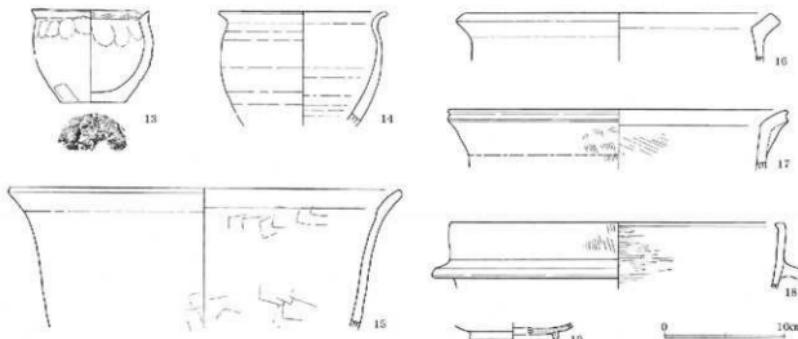
遺物は土師器壺（1～9）、皿（10～12）、鉢（13）、小型甕（14）、甕（15～17）、羽釜（18）、綠釉陶器の碗（19）が出土している。



第14図 5号住居跡



第15図 5号住居跡出土遺物(1)



第16図 5号住居跡出土遺物(2)

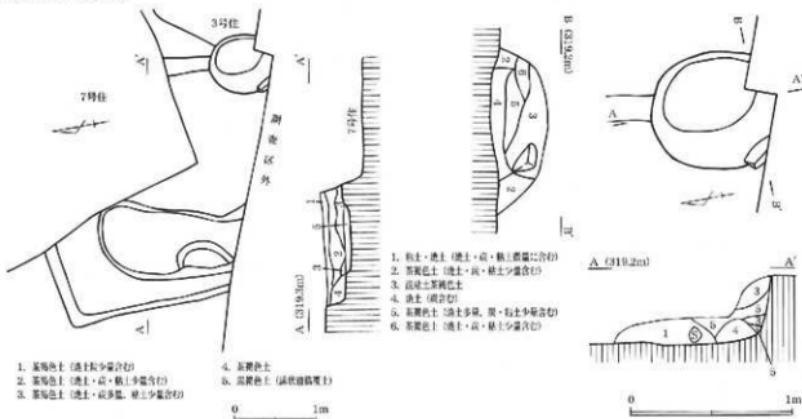
#### 6号住居跡（第17・18図、図版2・5・7、第5表）

本住居跡はA-6～7グリットにかけて位置している。北東部約1/4を7号住居跡に切られ、南側が調査区外にのび、南東部の3号住居跡を切ってつくられている。覆土下層より焼土・炭を多く出土している火災住居である。

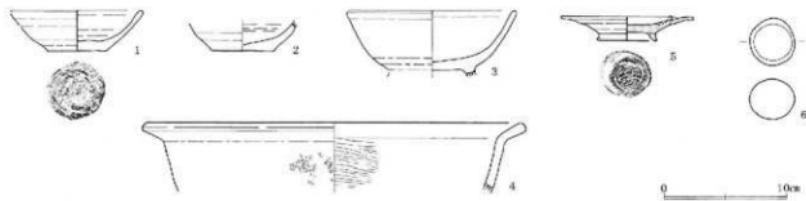
平面形は方形を呈すると思われ、規模は東西3.3m、南北は現状で3.3mあり、主軸方位はN-89°-Eを指す。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は最大で25cmある。床はおおむね平坦な地山で、硬化した面は確認できなかったが、比較的のしっかりしている。

カマドは南東隅につくられ、南側が一部調査区外にのびており、全長が現状で約0.8m、幅約0.8mある。粘土が少量残存しており、掘方から拳大ほどの石が出土しているが、袖石などの石材は確認されていない。また、燃焼部らしき掘り込みが見られ、多量の焼土がみつかっている。

住居西側に南の調査区外にのびる溝状の掘り込みが確認されている。床面より掘り込まれておらず、長さは現状で1.8m、幅0.8mあり、深さ5cmを測る。覆土には柔らかい黒色土が充填されているが、その性格は不明である。



第17図 6号住居跡



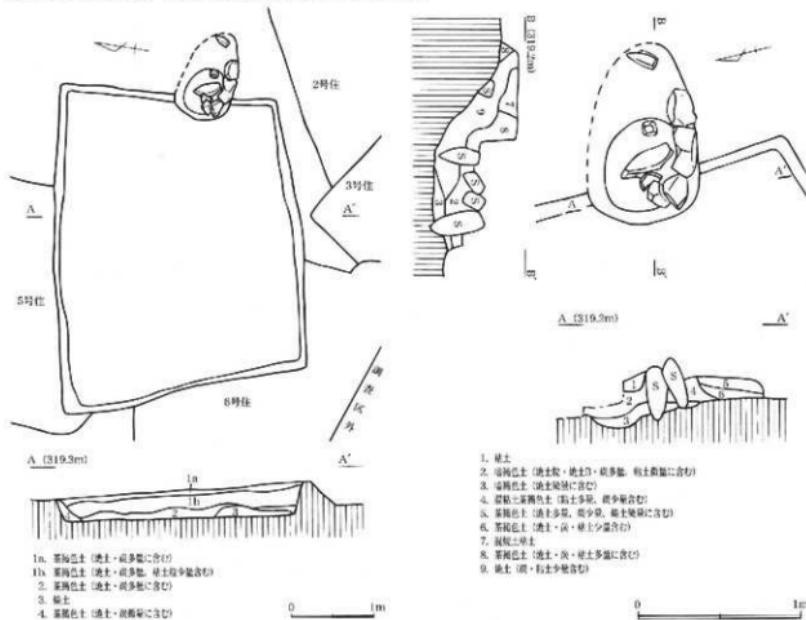
第18図 6号住居跡出土遺物

遺物の出土状況は床面から上師器の高台付壺（3）、カマド内から壺（1）・甕（4）が出土している。遺物は土師器壺（1・2）、高台付壺（3）、甕（4）、縄縹陶器の耳皿（5）、磨石（6）などが出土している。

#### 7号住居跡（第19～21図、図版2・6、第6表）

本住居跡はA-6・7、B-6グリットにかけて位置している。南側の6号住居跡と北側の5号住居跡を切ってつくられている。覆土下層より焼土・炭が多く出土している火災住居である。

平面形は長方形を呈し、規模は南北推定3.3m、東西3.3mあり、主軸方位はN-84°-Eを指す。壁は垂直に最大で25cmほど掘り込まれている。床は地山で南から北に向かって少し傾斜しており、硬化した面は確認できなかったが、比較的しっかりしている。

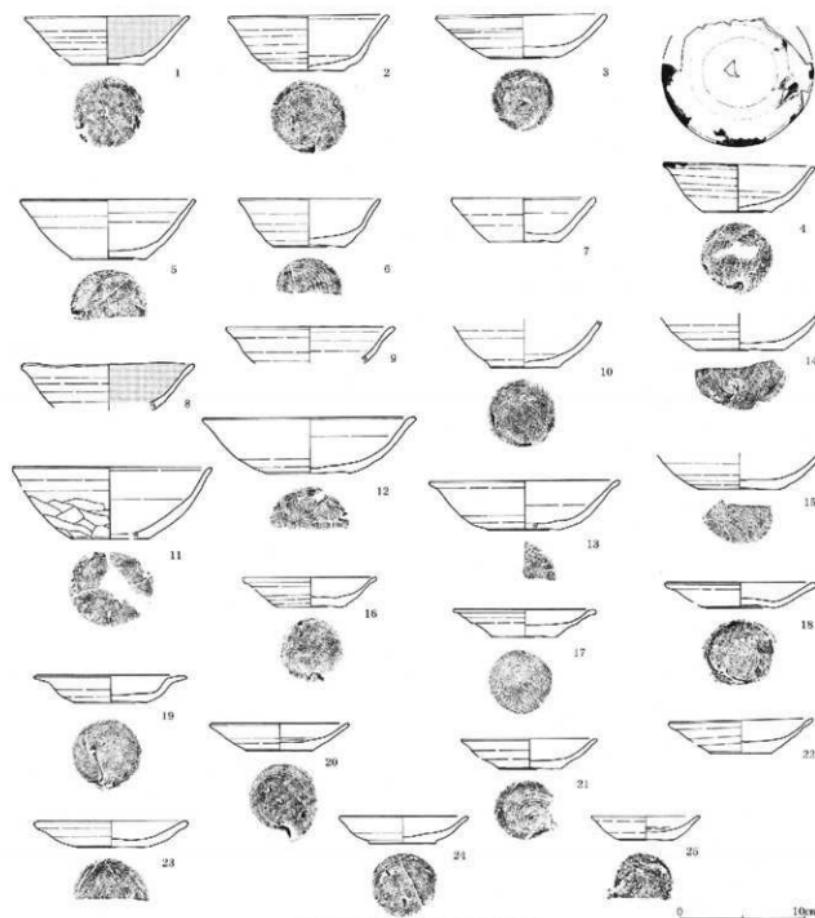


第19図 7号住居跡

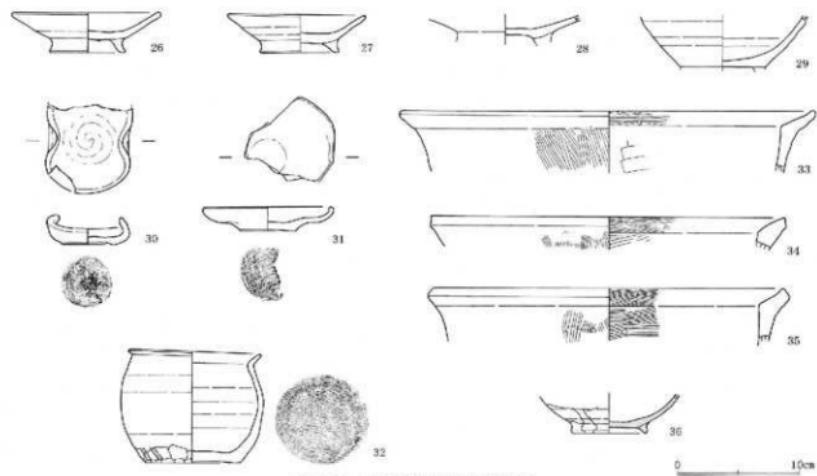
カマドは東壁中央やや南寄りにつくられており、左半分に搅乱を受けている。全長が推定 1.1 m、幅約 0.6 m あり、右袖には大きめの 3 つの石を並べた袖石が残存していた。カマド手前中央からは天井石らしい石がみつかっている。燃焼部にはごく浅い掘り込みがみられたが、焼土は微量しか確認されていない。

遺物は多量に出土しており、特に集中しているカマド前面から南壁にかけては土師器皿（18）が、住居中央から北壁にかけては土師器壺（2・8）、鉢（11）、皿（18）がいずれも床面上から出土している。また、カマド内からは土師器壺（4）が出土している。

遺物は土師器壺（1～10）・鉢（11～15）・皿（16～25）・高台付皿（26～28）・高台付壺（29）・耳皿（30・31）・小型壺（32）・壺（33～35）・灰釉陶器の碗（36）が出土している。壺（4）は口縁部にスス状の付着物があり、灯明皿として使用されていたものである。



第20図 7号住居跡出土遺物(1)

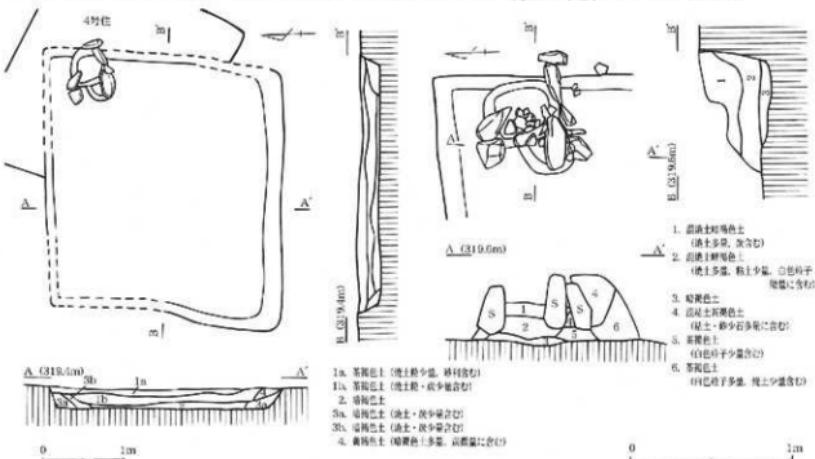


第21図 7号住居跡出土遺物(2)

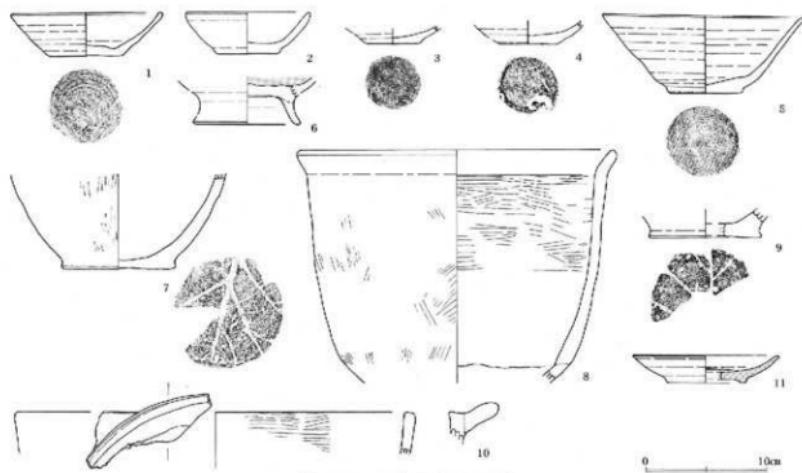
8号住居跡 (第22・23図、図版2・3・5・7、第7表)

本住居跡はA～B-5グリッドにかけて位置しており、4号住居跡を切ってつくられている。

平面形は方形を呈し、規模は南北3.0m、東西3.3mあり、主軸方位はN-90°-Eを指す。壁は垂直に最大で25cmほど掘り込まれている。床はほぼ平坦な地山で、硬化した面は確認できなかった。カマドは東壁中央よりやや北につくられ、北壁に擾乱を受けている。全長が推定で0.8m、幅約0.7mあり、両袖とも袖石が残存していた。燃焼部には浅い掘り込みがあるが、焼土の堆積はみられなかった。



第22図 8号住居跡



第23図 8号住居跡出土遺物

遺物の出土状況はカマド内から土師器窯（7・9）が出土している。

遺物は土師器坏（1～4）・鉢（5）・高台付坏（6）・窯（7～9）・置きカマドの口縁部片（10）・灰釉陶器の皿（11）が出土している。

#### 10号住居跡（第24・25図、図版3・5・7、第8表）

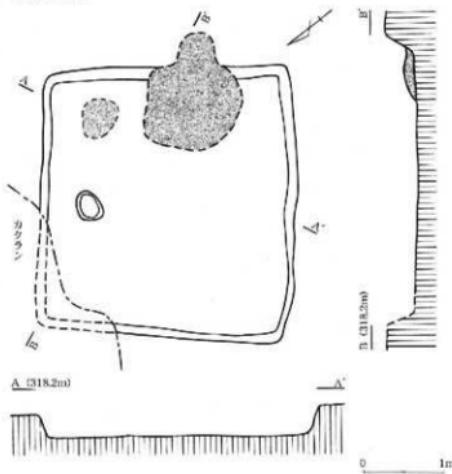
本住居跡はA・B-11・12グリットにかけて位置し、北西隅部に大きな擾乱を受けている。

平面形は方形を呈し、規模は南北3.2m、東西3.2mである。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は最大で25cmある。床はほぼ平坦な地山で、硬化した面は確認できなかったが、北東部の焼土部分に一部焼けて硬化した面がみられた。

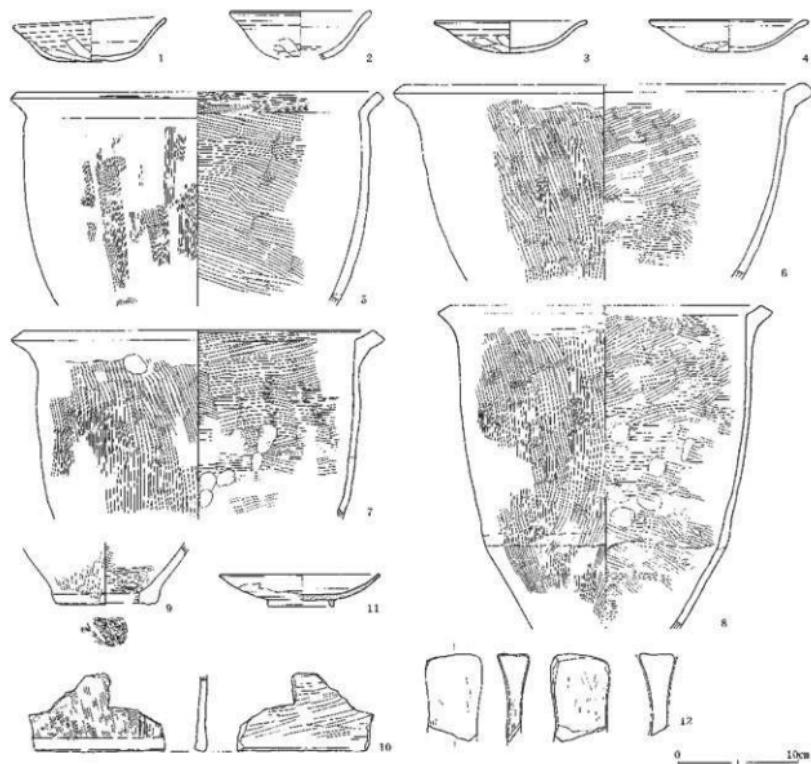
東壁中央部から焼土がまとめて出土しており、カマドであると思われるが、遺存状態が悪く、焼土範囲を確認することしかできなかった。

また、北壁中央部に長軸40cm、短軸30cm、深さ5cmほどの浅いピットが確認され、中から窯の破片が出土している。

遺物の出土状況はカマド内から窯（5・6）、灰釉陶器の皿（11）が出土し、南壁中央付近から坏（1・2）が、西壁中央や



第24図 10号住居跡



第25図 10号住居跡出土遺物

や南寄りから撒きカマド（10）、砥石（12）がそれぞれ床面から出土している。

遺物は土師器壺（1・2）・皿（3・4）・甕（5～9）・撒きカマドの底部片（10）・灰釉陶器の皿（11）・砥石（12）が出土している。

#### 11号住居跡（第26・27図、図版3・6、第9表）

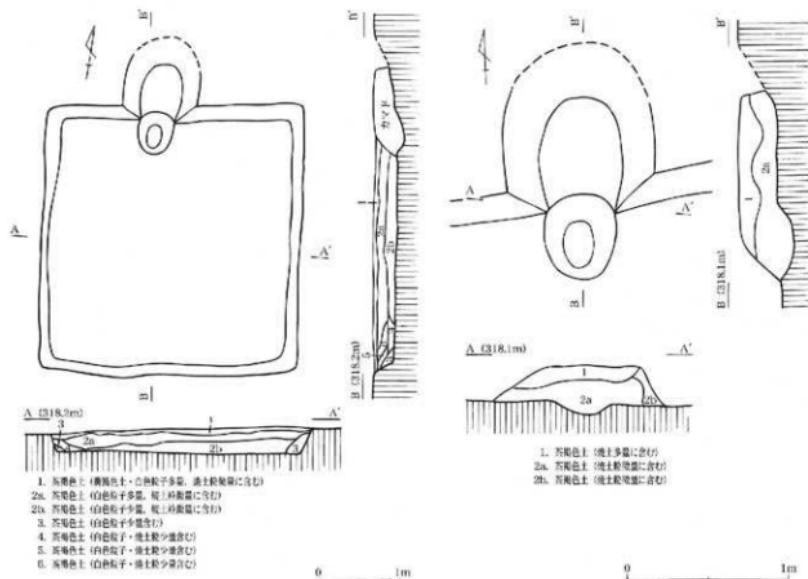
本住居跡はA・B-9グリットに位置している。

平面形は方形を呈し、規模は南北3.2m、東西3.2mあり、主軸方位はN-6°-Wを指す。壁は少し緩やかに立ち上がり、壁高は最大で25cmある。床は地山で、硬化した面は確認されていない。

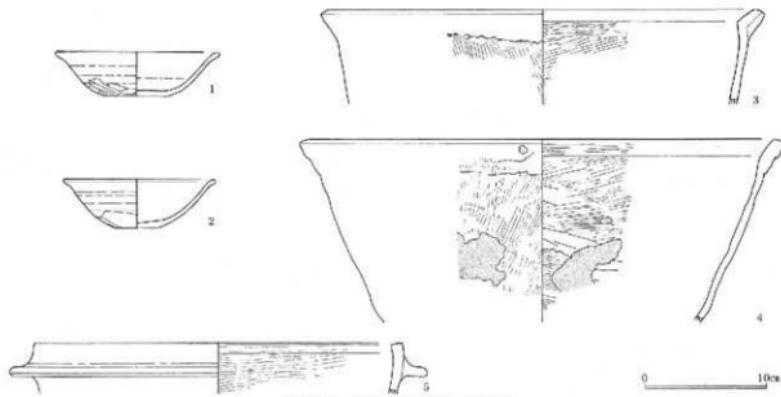
カマドは北壁中央やや西寄りにつくられており、北側は擾乱で壊されていた。全長が推定1.1m、幅約1.2mある。袖石などの石材は全くなく、粘土もわずかに残る程度である。燃焼部にはピット状の掘り込みがあり、そこから焼土が多量に出上した。

遺物の出土状況は壺（1・2）、甕（3・4）、羽釜（5）などほとんどの遺物がカマド内から出土しており、住居覆土中からはあまり出土していない。

遺物は土師器壺（1・2）・甕（3・4）・羽釜（5）が出土している。



第26図 11号住居跡



第27図 11号住居跡出土遺物

13号住居跡（第28・29図、図版3・4・6、  
第10表）

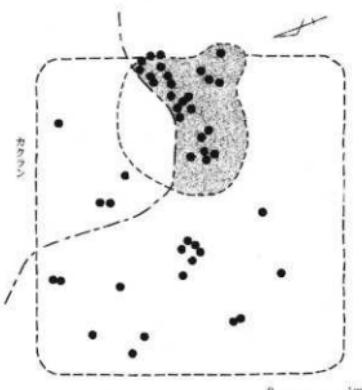
本住居跡はA・B-8・9グリットに位置している。大きな搅乱があり、床面も不明瞭で立ち上がりも不明だが、遺物が床面上から潰れた状態で多数出土していることから、この範囲に遺構があったと推定した。

平面形は不明だが、規模は推定で一辺2.7mほどと推測される。床面はカマド周辺のみで、立ち上がりや硬化面などは不明である。

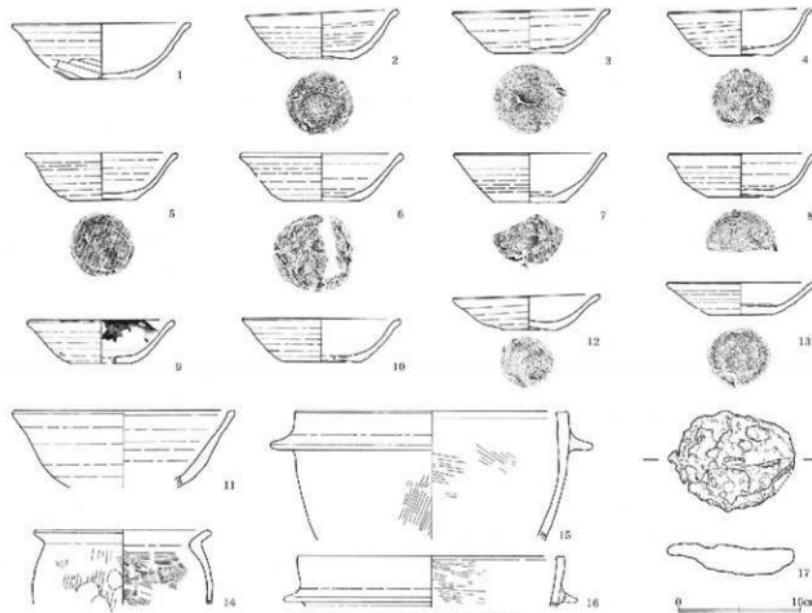
カマドらしき跡が東壁中央にあり、左側を搅乱で埋され、袖石などもなく、焼土・粘土の混ざった跡が残存しているのみである。規模は現状で全長1.6m、幅0.8mほどの範囲に拡がっている。

遺物の出土状況はカマド内から土師器壺(7)・皿(12)・羽釜(15・16)などが出土している。

遺物は土師器壺(1～10)・鉢(11)・皿(12～13)・小型甕(14)・羽釜(15・16)・鐵滓(17)が出土している。



第28図 13号住居跡



第29図 13号住居跡出土遺物

第1表 2号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	特因図版
1	土師器 环	65	口縁～ 底部	高 4.3 口 12.2 底 4.6	外外面一ロクロナデ→ヘラケズリ 内面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	やや粗(白色 粒子多・赤色 粒子少) 良	黄褐色		10-1 5
2	土師器 环	50	口縁～ 底部	高 4.0 口 14.8 底 6.5	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 金雲母微 量) 及	明赤褐色		10-2 —
3	土師器 环	10	口縁～ 底部	高 4.1 口 [15.8] 底 [7.0]	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 金雲母微 量) 良	にぶい 赤褐色		10-3
4	土師器 环	—	底部片	高 (2.2) 底 [6.0]	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子 多・青雲母) 及	赤褐色		10-4 —
5	土師器 小型甕	70	口縁～ 底部	高 7.8 口 11.3 底 7.0	外外面一ロクロナデ→ヘラケズリ 内面一ロクロナデ	密(赤色粒子) 良	暗赤褐色 褐色	底部外面黒く変色	10-5 5
6	灰陶陶器 長颈瓶	—	口縁部 片	高 (7.8) 口 [13.4]	外外面一ロクロ整形	緻密	灰白色	内外面に輪付葉	10-6 —
7	綠釉陶器 段皿	70	口縁～ 底部	高 2.9 口 [17.0] 底 9.4	外外面一ロクロ整形	緻密 良	黄オーラ ブ色	全面施釉 貼り付け高台	10-7 5

第2表 3号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	特因図版
1	土師器 环	—	口縁部 片	高 (1.8) 口 [12.4]	外外面一ロクロナデ	密(赤色粒子) 良	橙色		11-1 —
2	土師器 环	—	底部片	高 (1.5) 底 6.0	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子 多) 及	暗褐色 黑褐色	黑色土器	11-2 —
3	土師器 环	—	底部片	高 (2.6) 底 [9.3]	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤・白色粒子) 及	黄褐色		11-3 —
4	土師器 鉢	—	底部片	高 (2.6) 底 [9.2]	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子) 良	黄褐色		11-4 —

第3表 4号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	特因図版
1	土師器 环	30	口縁～ 底部	高 4.4 口 [12.8] 底 [5.2]	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	緻密(赤色粒子 金雲母多) 良	赤褐色 暗褐色	薄い黒色土器	13-1 —
2	土師器 环	—	口縁部 片	高 (3.8) 口 [13.2]	外外面一ロクロナデ	密(赤色粒子) 良	明赤褐色		13-2 —
3	土師器 鉢	20	底部 のみ	高 (6.4) 底 9.4	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(白色粒子 多・赤色粒子) 良	明赤褐色 暗褐色	黑色土器	13-3 —

遺物番号	器種	状態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考	特因図版
4	磨石	完形	6.6	6.4	5.3	295	閃緑岩	敲き痕あり	13-4 7

第4表 5号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	特因図版
1	土師器 环	50	口縁～ 底部	高 3.7 口 [11.3] 底 5.2	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 金雲母) 良	明赤褐色		15-1 —
2	土師器 环	90	口縁～ 底部	高 3.5 口 12.4 底 5.6	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り・ナデ	密(赤色粒子) 良	黄褐色 明赤白色	内・外面が変色 全体に磨耗している	15-2 5
3	土師器 环	—	口縁部 片	高 (4.0) 口 [12.6]	外外面一ロクロナデ	密(赤色粒子・ 金雲母) 良	黄褐色		15-3 —
4	土師器 环	—	底部 のみ	高 (2.3) 底 5.6	外外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	緻密(赤・白色 粒子) 良	にぶい 黄褐色		15-4 —

5	土師器 外	-	底部 のみ	高 (2.0) 底 6.5	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子- 雲母) 良	黄褐色 黒褐色	黒色土器	15-5 -
6	土師器 坏	-	底部片	高 (2.8) 底 6.6	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り・櫛目痕	密(赤色粒子- 雲母) 良	褐色 黒褐色	黑色土器	15-6 -
7	土師器 坏	-	底部 のみ	高 (3.5) 底 5.6	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子- 白色 粒子微) 良	明黄褐色		15-7 -
8	土師器 坏	-	底部 のみ	高 (3.3) 底 [6.6]	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子- 雲母) 良	暗褐色 茶褐色	内面が著しく磨耗してい る	15-8 -
9	土師器 坏	-	底部 のみ	高 (2.3) 底 [6.0]	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子- 雲母) 良	黄褐色 黒色	内面に黒色の墨が付着し ており、漆塗め用に使用 された外	15-9 -
10	土師器 皿	30	口縁- 底部	高 2.6 口 [12.3] 底 [5.4]	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子- 多-白色粒子) 良	黄褐色		15-10 -
11	土師器 皿	95	口縁- 底部	高 2.0 口 11.5 底 5.7	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子- 多) 良	明赤褐色		15-11 5
12	土師器 皿	15	口縁- 底部	高 2.1 口 [10.6] 底 [4.8]	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤-白色粒 子) 良	赤褐色		15-12 -
13	土師器 鉢	70	口縁- 底部	高 7.7 口 9.4 底 [5.6]	外面 ナデ-ヘラケズリ- 内面-ハケ-ナデ- 底部-小集瓶	やや粗(金-黒 雲母多) 良	暗褐色		16-13 5
14	土師器 小型壺	70	口縁- 腹部	高 (9.5) 口 13.6	内外面-ロクロナデ	密(赤色粒子- 雲母) 良	明赤褐色 黒褐色	外面 部黒く変色 内黒状に黒化している	16-14 5
15	土師器 壺	-	口縁部 のみ	高 (11.6) 口 [32.0]	外面-ナデ-ヘラケズリ 内面-ナデ-ヘラナデ	やや粗(金-黒 雲母多) 良	橙色		16-15 -
16	土師器 壺	-	口縁部 片	高 (4.0) 口 [25.0]	内外面-ナデ	密(雲母多) 良	暗茶褐色		16-16 -
17	土師器 甕	-	口縁部 片	高 (5.0) 口 [27.8]	内外面-ハケ-ナデ	やや粗(雲母 多) 良	暗黑褐色		16-17 -
18	土師器 羽釜	-	口縁部 片	高 (5.5) 口 [27.6]	内外面-ハケ-ナデ- 指押さえ	やや粗(雲母- 多-白色粒子) 良	暗黑褐色		16-18 -
19	縄袖陶器 碗	-	底部 のみ	高 (1.5) 底 [7.1]	内外面-ロクロ整形	織密 良	黄オリーブ色	全面施釉 貼り付け高台	16-19 -

第5表 6号住居跡遺物観察表

遺物 番号	種別 種	残存 (%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
1	土師器 坏	65	口縁- 底部	高 3.4 口 [10.7] 底 4.8	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(白色粒子) 良	褐色		18-1 5
2	土師器 坏	-	底部片	高 (2.6) 口 [5.0]	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り-ハケ	密(赤色粒子) 良	褐色	内外面にスス付着	18-2 -
3	土師器 高台付坏	80	口縁- 底部	高 (5.5) 口 13.8 底 (7.5)	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(白色粒子- 雲母微) 良	褐色	貼り付け高台	18-3 5
4	土師器 壺	-	口縁部 片	高 (5.8) 口 [30.8]	内外面-ハケ-ナデ	やや粗(白色 粒子) 良	暗茶褐色		18-4 -
5	縄袖陶器 耳皿	30	口縁- 底部	高 2.0 口 [10.6] 底 [4.6]	内外面-ロクロ整形 底部-回転糸切り	織密 良	オリーブ 色	全面施釉 貼り付け高台	18-5 -

遺物 番号	岩種	状態	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考	挿図 図版
6	脣石	完形	3.9	3.7	3.4	72	砂岩		18-6 7

第6表 7号住居跡遺物観察表

遺物 番号	種別 種	残存 (%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
1	土師器 坏	40	口縁- 底部	高 4.0 口 [13.4] 底 6.0	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子) 良	赤褐色 黒色	黑色土器	20-1 -
2	土師器 坏	60	口縁- 底部	高 4.6 口 13.3 底 6.0	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子- 多) 良	黃褐色		20-2 -

3	土師器 杯	30	口縁～ 底部	高 口 [13.9] 底 5.2	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	にぶい 橙色		20-3 -
4	土師器 杯	75	口縁～ 底部	高 口 3.7 底 5.4	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子) 良	橙色	口唇部にスヌ状の付着物 あり、灯明皿として使用 された跡	20-4 6
5	土師器 坪	40	口縁～ 底部	高 口 [5.0] 底 6.2	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	赤褐色	外面にスヌ付着	20-5 -
6	土師器 坪	30	口縁～ 底部	高 口 [4.0] 底 [6.0]	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	橙色		20-6 -
7	土師器 坪	20	口縁～ 底部	高 口 [3.7] 底 [5.7]	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(白色粒子・ 雲母) 良	赤褐色		20-7 -
8	土師器 坪	65	口縁部のみ	高 ( 3.8 ) 口 14.0	内外面 ロクロナデ	密 良	黄褐色 黒色	墨色土器	20-8 -
9	土師器 坪	-	口縁部のみ	高 ( 3.0 ) 口 [13.7]	内外面 ロクロナデ	密(赤色粒子・ 雲母) 良	暗褐色		20-9 -
10	土師器 坪	55	胴部～ 底部	高 ( 4.0 ) 口 5.8	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	にぶい 橙色		20-10 -
11	土師器 鉢	70	口縁～ 底部	高 口 [6.0] 底 6.2	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	赤褐色	表面に一部剥がれた状態 がみられる	20-11 6
12	土師器 鉢	35	口縁～ 底部	高 口 [4.7] 底 7.0	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	橙色 暗褐色	外面に焼けて黒く変色 した部分あり	20-12 -
13	土師器 鉢	25	口縁～ 底部	高 口 [4.1] 底 [6.0]	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子) 良	にぶい 赤褐色		20-13 -
14	土師器 鉢	-	底部片 底	高 ( 3.0 ) 底 [7.0]	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子) 良	赤褐色		20-14 -
15	土師器 鉢	15	胴部～ 底部	高 ( 3.0 ) 底 [6.2]	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子) 良	黒黄褐色 明赤褐色		20-15 -
16	土師器 皿	75	口縁～ 底部	高 口 [2.5] 底 5.3	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子多・ 雲母) 良	橙色		20-16 -
17	土師器 皿	25	口縁～ 底部	高 口 [11.3] 底 5.3	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	橙色		20-17 -
18	土師器 皿	35	口縁～ 底部	高 口 [12.2] 底 5.5	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子) 良	橙色 赤褐色		20-18 -
19	土師器 皿	85	口縁～ 底部	高 口 12.2 底 5.9	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	黄褐色 橙色		20-19 6
20	土師器 皿	75	口縁～ 底部	高 口 11.4 底 5.6	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子多・ 雲母) 良	赤褐色		20-20 6
21	土師器 皿	55	口縁～ 底部	高 口 [11.2] 底 5.5	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子) 良	赤褐色		20-21 6
22	土師器 皿	60	口縁～ 底部	高 口 [11.3] 底 4.8	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	黄褐色 橙色		20-22 -
23	土師器 皿	15	口縁～ 底部	高 口 [12.0] 底 [5.7]	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子多) 良	赤褐色		20-23 -
24	土師器 皿	80	口縁～ 底部	高 口 10.5 底 5.4	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子多・ 雲母) 良	にぶい 橙色		20-24 6
25	土師器 皿	20	口縁～ 底部	高 口 [8.9] 底 4.4	内外面 ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 雲母) 良	にぶい 橙色		20-25 -
26	土師器 高台付皿	50	口縁～ 底部	高 口 12.0 底 6.2	内外面 ロクロナデ	密(赤色粒子) 良	黄褐色	貼り付け高台	20-26 6
27	土師器 高台付皿	80	口縁～ 底部	高 口 11.6 底 6.5	内外面 ロクロナデ	密(赤色粒子) 良	黄褐色	貼り付け高台	21-27 6

28	土師器 高台付皿	60	胴部～ 底部	高 (2.0)	内外面一ロクロナデ	密(赤色粒子) 良	橙色		21-28 -
29	土師器 高台付坏	30	胴部～ 底部	高 (5.3)	内外面一ロクロナデ	密 良	にぶい 赤褐色		21-29 -
30	土師器 耳皿	80	口縁～ 底部	高 2.4 口 [8.8] 底 5.3	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子 多) 良	暗褐色		21-30 6
31	土師器 耳皿	20	口縁～ 底部	高 2.0 口 [10.4; 底 [4.6]	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子 微) 良	黄褐色 明橙色		21-31 -
32	土師器 小型甕	90	口縁～ 底部	高 9.2 口 10.8 底 7.6	外面一ロクロナデ→ヘラケズリ 底部一糸切り→ヘラケズリ	密(赤色粒子) 良	黒赤褐色 赤褐色	外面にスス付着	21-32 6
33	土師器 甕	-	口縁部 片	高 (5.0) 口 [33.6]	外面一ハケ 内面一ハケ→ヘラナデ	やや粗(白色 粒子) 良	赤茶褐色		21-33 -
34	土師器 甕	-	口縁部 片	高 (2.7) 口 [29.0]	内外面一ハケ・ナデ	やや粗(白色 粒子) 良	黒褐色		21-34 -
35	土師器 甕	-	口縁部 片	高 (4.7) 口 [28.6]	内外面一ハケ・ナデ	やや粗(白色 粒子) 金雲母 多) 良	暗茶褐色		21-35 -
36	灰釉陶器 瓶	15	胴部～ 底部	高 (3.5) 底 (6.0)	内外面一ロクロ整形	緻密 良	灰白色	外面に釉付着 貼り付け高台	21-36 6

第7表 8号住居跡遺物観察表

遺物 番号	種別 器種	残存 (%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	神園 図版
1	土師器 坏	80	口縁～ 底部	高 3.6 口 12.3 底 6.0	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤・白色粒子 ・雲母) 良	橙色		23-1 5
2	土師器 坏	60	口縁～ 底部	高 3.5 口 [10.2] 底 5.2	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤・白色粒子) 良	明赤褐色		23-2 5
3	土師器 坏	-	底部片	高 (1.1) [4.4]	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	緻密(赤色粒子 多) 良	明赤褐色		23-3 -
4	土師器 坏	-	底部片	高 (2.0) [4.6]	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子) 良	橙色		23-4 -
5	土師器 鉢	60	口縁～ 底部	高 6.5 口 [16.6] 底 6.0	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(白色粒子 ・雲母多・赤色 粒子) 良	暗褐色		23-5 5
6	土師器 高台付坏	-	高台部 のみ	高 (3.9) 脚 8.8	内外面一ロクロナデ	密(赤・白色粒子) 良	茶褐色 黒褐色	黒色上器 貼り付け高台	23-6 -
7	土師器 甕	20	胴部～ 底部	高 (7.9) 底 [9.0]	外面一ハケ・ナデ 内面一ナデ 底部一木漿痕	やや粗(白・黒 色粒子・雲母) 良	暗褐色		23-7 -
8	土師器 甕	35	口縁～ 胴部	高 (19.3) 口 [26.0]	外面一ハケ・ナデ	密(白色粒子 ・雲母) 良	茶褐色		23-8 5
9	土師器 甕	-	底部片	高 (2.4) 底 [9.2]	内外面一ナデ 底部一木漿痕	やや粗(雲母 多・白色粒子) 良	にぶい 黄褐色		23-9 -
10	土師器 置き カマド	-	口縁部 片	高 (3.5) 口 [33.0]	外面一ナデ・指痕痕 内面一ハケ	やや粗(金雲 母多) 良	赤褐色 黒褐色		23-10 7
11	灰釉陶器 皿	20	口縁～ 底部	高 2.3 口 [12.0] 底 [6.4]	内外面一ロクロ整形	緻密 良	灰白色	内面に釉付着	23-11 -

第8表 10号住居跡遺物観察表

遺物 番号	種別 器種	残存 (%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	神園 図版
1	土師器 坏	80	口縁～ 底部	高 3.6 口 12.5 底 4.7	外面一ロクロナデ→ヘラケズリ 内面一ロクロナデ 底部一ヘラケズリ	密(赤色粒子 多) 良	赤褐色		25-1 5
2	土師器 坏	10	口縁～ 胴部	高 (4.1) 口 [11.6]	外面一ロクロナデ→ヘラケズリ 内面一ロクロナデ 底部一ヘラケズリ	密(赤・白色粒子 ・雲母) 良	にぶい 褐色		25-2 ..
3	土師器 皿	95	口縁～ 底部	高 2.7 口 12.4	外面一ロクロナデ→ヘラケズリ 内面一ロクロナデ 底部一ヘラケズリ	密(赤色粒子 多) 良	にぶい 赤褐色 暗茶褐色		25-3 6

4	土師器皿	35	口縁～底部	高 2.7 口 [13.0]	外面-ロクロナデ-ヘラケズリ 内面-ロクロナデ 底部-ヘラケズリ	密(赤色粒子多・金雲母良)	桜色		25-4 -
5	土師器皿	-	口縁～胸部	高 (16.0) 口 [30.0]	内外面-ハケ・ナデ	やや粗(白色粒子多)	にぶい 暗黄褐色		25-5
6	土師器皿	-	口縁前片	高 (16.0) 口 33.2	内外面-ハケ・ナデ	やや粗(白色粒子多)	暗茶褐色		25-6 -
7	土師器皿	-	口縁～胸部	高 (27.0) 口 [25.6]	外面-ハケ・指押え・ナデ 内面-ハケ・ナデ	やや粗(白色粒子・金雲母多)	暗茶褐色		25-7 5
8	土師器皿	-	口縁～胸部	高 (15.7) 口 [29.6]	外面-ハケ 内面-ハケ・指押え	やや粗(白色粒子・金雲母多)	暗茶褐色 暗赤褐色		25-8 5
9	土師器皿	-	胸部～底部	高 (5.2) 底 [8.4]	内外面-ハケ・ナデ 底部-木葉痕	やや粗(金雲母多)	暗褐色		25-9 -
10	土師器皿 置きカマド	-	底部片	-	内外面-ハケ	やや粗(金雲母多)	赤褐色 暗赤褐色		25-10 7
11	灰陶軸器皿	95	口縁～底部	高 2.7 口 13.3 底 5.3	内外面-ロクロ整形	櫻色 良	灰色	内外面に釉付着	25-11 5

遺物番号	器種	状態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考	押印	図版
12	磁石	一部欠	(7.2)	4.7	2.6	105	砂岩		25-12	7

第9表 11号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存率(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	押印
1	土師器外	50	口縁～底部	高 3.7 口 [13.0] 底 5.0	外面-ロクロナデ-ヘラケズリ 内面-ロクロナデ 底部-ヘラケズリ	密(赤色粒子・金雲母良)	明赤褐色 暗褐色		27-1 -
2	土師器外	60	口縁～底部	高 4.0 口 12.3 底 3.6	外面-ロクロナデ-ヘラケズリ 内面-ロクロナデ 底部-ヘラケズリ	密(赤・白色粒子・雲母良)	にぶい 褐色		27-2 6
3	土師器皿	-	口縁前片	高 (7.8) 口 [35.0]	内外面-ハケ・ナデ	やや粗(金雲母多)	明赤褐色		27-3 -
4	土師器皿	-	口縁前片	高 (15.0) 口 [40.4]	外面-ハケ・ナデ 内面-ハケ-ヘラナデ・ナデ	やや粗(金雲母多・白色粒子良)	赤褐色	内外面に施土が多量に付着	27-4 -
5	土師器皿羽釜	-	口縁部片	高 (4.2) 口 [30.2]	外面-ナデ・指押さえ 内面-ハケ	やや粗(金雲母多)	赤褐色		27-5 -

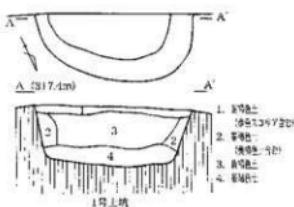
第10表 13号住居跡遺物観察表

遺物番号	種別器種	残存率(%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	押印
1	土師器外	50	口縁～底部	高 4.6 口 [14.5] 底 5.5	外面-ロクロナデ-ヘラケズリ 内面-ロクロナデ 底部-ヘラケズリ	密(赤色粒子多・赤色粒子良)	橙色		29-1 -
2	土師器外	98	ほぼ 完形	高 3.8 口 12.3 底 5.3	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子多)	明赤褐色		29-2 6
3	土師器外	100	完形	高 3.5 口 12.7 底 5.8	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤・白色粒子多)	明赤褐色	全体的に磨耗している	29-3 6
4	土師器外	80	口縁～底部	高 3.7 口 11.7 底 5.2	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤・白色粒子・金雲母良)	明赤褐色	全体的に磨耗している	29-4 6
5	土師器外	75	口縁～底部	高 3.9 口 [12.4] 底 5.3	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子)	赤褐色		29-5 6
6	土師器外	75	口縁～底部	高 4.0 口 [13.0] 底 6.2	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤色粒子多)	にぶい 赤褐色 赤褐色		29-6 6
7	土師器外	30	口縁～底部	高 4.1 口 [12.3] 底 5.9	内外面-ロクロナデ 底部-回転糸切り	密(赤・黒色粒子多)	赤褐色		29-7 -

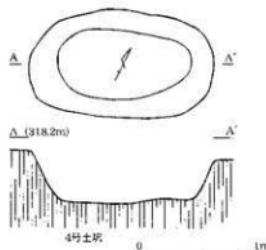
8	土師器 壺	30	口縁～ 底部	高 口 [12.1] 底 [5.6]	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子 多) 良	橙色		29-8 -
9	土師器 壺	10	口縁～ 底部	高 口 [11.8] 底 [5.2]	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子 多) 良	暗褐色 にぶい 緑色	口唇部にスヌ状の付着 物あり、灯明皿として使 用された外	29-9 -
10	土師器 壺	25	口縁～ 底部	高 口 [12.6] 底 [6.4]	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤・白色粒 子多) 良	にぶい 黄褐色		29-10 -
11	土師器 鉢	-	口縁部 片	高 (6.3) 口 [18.0]	内外面一ロクロナデ	密(赤・黒色粒 子) 良	黄褐色		29-11
12	土師器 皿	90	口縁部 一部欠	高 口 [12.0] 底 4.4	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤・白色粒 子多) 良	明赤褐色	全体的に磨耗している	29-12 6
13	土師器 皿	40	口縁～ 底部	高 2.7 口 [12.1] 底 5.2	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	密(赤・黒色粒 子多) 良	赤褐色		29-13 -
14	土師器 小型甕	-	口縁部 片	高 (6.2) 口 [14.2]	外面一ハケ・指押さえ 内面一ハケ・ナデ	密(白色粒子) 良	暗褐色		29-14 -
15	土師器 羽釜	-	口縁部 片	高 (10.7) 口 [22.4]	内外面一ハケ・ナデ	やや粗(赤色 粒子多) 良	暗褐色		29-15 -
16	土師器 羽釜	-	口縁部 片	高 (4.23) 口 [21.8]	外面一ナデ 内面一ナデ・指頭痕	やや粗(白 色粒子多) 良	橙色		29-16 -
遺物番号	種類	出土位置	状態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	挿図 図版
17	鐵滓	13号住	一部欠	9.7	8.3	2.3	255	橢形律	29-17 6

## 2. 土坑 (第30・31図、図版4、第11～13表)

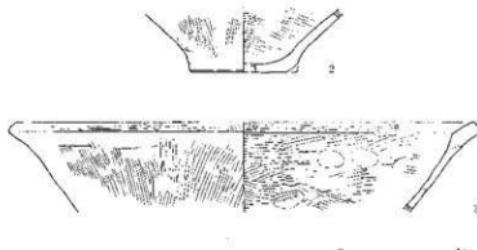
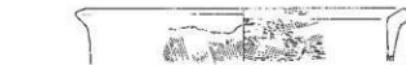
本遺跡から今回確認された土坑は5基あり、そのうち平安時代のものが2基（1・4号土坑）確認されている。各土坑の詳細については図と観察表を参照されたい。



1号土坑からは土師器の窯（1・2）が出土しており、10世紀代に属するものと思われる。4号土坑からは土師器の窯（3）が出土しており、10世紀後半代のものと思われる。



第30図 土坑 (平安時代)



第31図 土坑出土遺物 (平安時代)

第11表 土坑一覧表 (平安時代)

土坑No	グリット	重複	平面形	規模(cm)		備考	挿図No	図版No
				大きさ	深さ			
1	A-11	—	楕円形	130×(60)	50	南側一部調査区外	30	4
4	B-10	—	楕円形	60×(37)	40		30	4

第12表 1号土坑遺物観察表

遺物番号	種別 器種	残存 (%)	部位	大きさ(cm)	文様・調整・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
1	土師器 甕	—	口縁部 片	高(4.4) 口[26.4]	内外面一ハケ・ナデ	やや粗(赤・白 色粒子・金雲母 多) 良	暗茶褐色		31-1 —
2	土師器 甕	—	底部片	高(5.3) 底[8.6]	内外面一ハケ・ナデ 底部一木葉痕	やや粗(白色 粒子・金雲母 多) 良	暗褐色 黄褐色		31-2 —

第13表 4号土坑遺物観察表

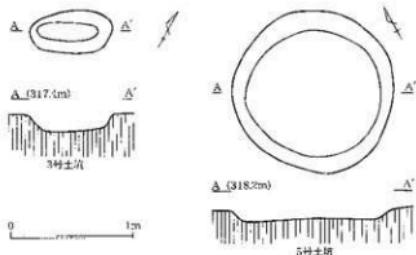
遺物番号	種別 器種	残存 (%)	部位	大きさ(cm)	文様・調整・技法	胎土	色調	備考	挿図 図版
1	土師器 甕	—	口縁部 片	高(7.4) 口[26.4]	外面一ハケ・ナデ 内面一ハケ・拘持さえ	やや粗(赤・白 色粒子・金雲母 多) 良	にぶい 暗褐色		31-3 —

### 第3節 時期不明の遺構

#### 1. 土坑 (第32図、図版4、第14表)

本遺跡から今回確認された土坑は5基あり、そのうち時期不明のものが2基 (3・5号土坑) ある。各土坑の詳細については図と観察表を参照されたい。

3・5号土坑はいずれも単層で遺物もなく、深さも10cm前後と浅く、重複関係もない。平面形も円形・楕円形で、覆土はいずれも茶褐色土が主体である。



第32図 土坑 (時期不明)

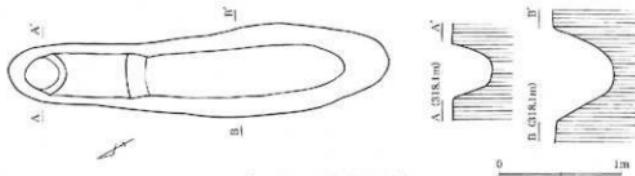
第14表 土坑一覧表 (時期不明)

土坑No	グリット	重複	平面形	規模(cm)		備考	挿図No	図版No
				大きさ	深さ			
3	A-12	—	楕円形	60×(36)	35		32	4
5	A-10	—	円形	60×(38)	10		32	—

#### 2. 溝状遺構

##### 1号溝状遺構 (第33図、図版4、第14表)

A・B-10グリットに位置し、重複関係はみられない。ほぼ南北の方向に長さ3.1m、幅0.5~0.7m、深さ15~50cmを測る。北端に直径35cm、深さ30cmほどにピット状に落ち込んだ部分があり、南側も深さ15cmほど深くなっている。覆土は茶褐色土が主体である。遺物は出土しておらず、時期などについては不明である。



第33図 1号溝状遺構

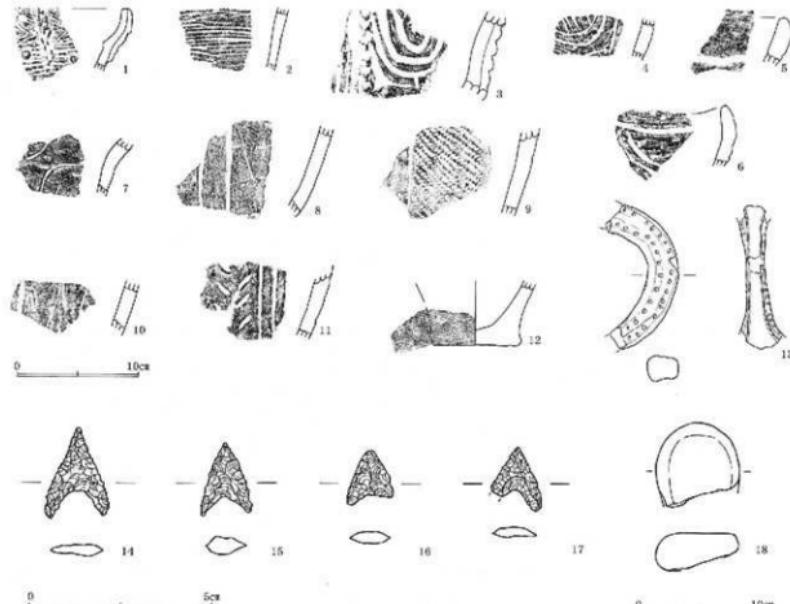
#### 第4節 遺構外出土遺物（第34～36図、図版7、第15～18表）

本遺跡からは縄文時代の土坑1基、平安時代の住居跡が10軒、土坑2基、時期不明の土坑2基、溝状遺構1条などの多くの遺構が確認されており、それとともに遺構外遺物も多数出土している。

縄文時代では中期前葉の土器（1・2）、中期中葉の土器（3・4）、中期後葉の土器（5・13）などが出土している。また、黒曜石の石鏃（14～17）・磨石（18）などの石器も確認されている。

平安時代では土師器壺（19～30）・皿（31～35）・高台付壺（36・37）・柱状高台壺（38～40）・小型壺（41）・甕（42）・羽釜（43）・置きカマド（44・45）、須恵器の短頸壺（46）・壺（47）、灰釉陶器の碗（48・49）・皿（50）・甕（51）・吹子の羽口片（52）などが出土している。

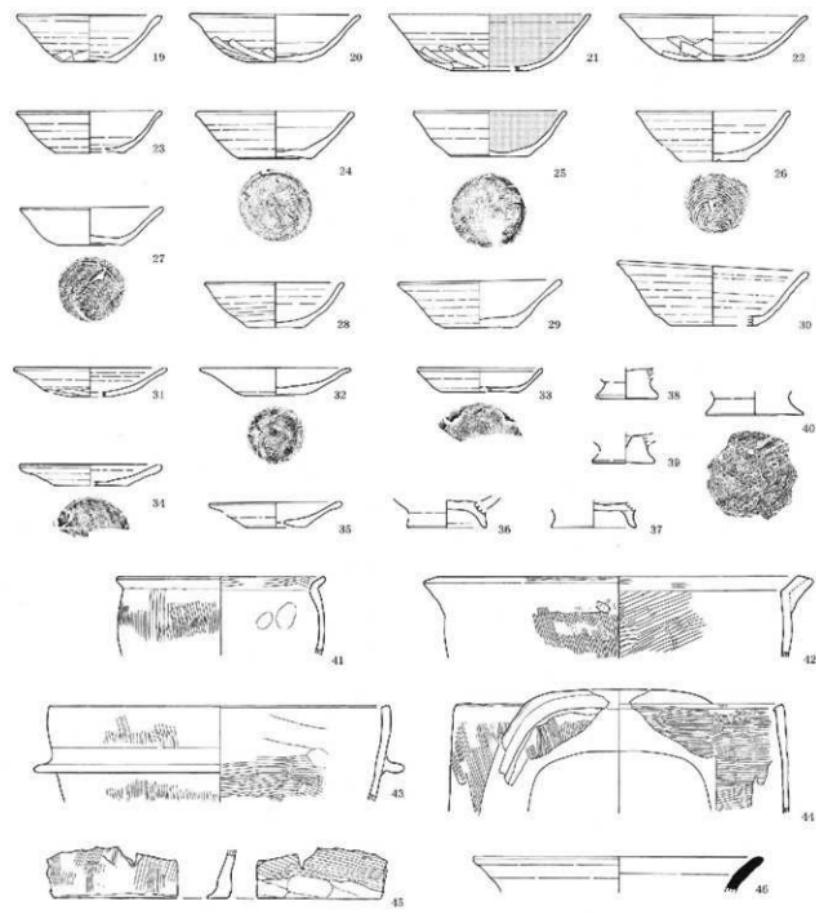
中世以降の遺物も出土しており、瓦質土器の香炉（53）・内耳土器（54）、灰釉陶器の卸目皿の破片（55）、青磁の碗の破片（56）などが出土している。また、釘などの鉄製品（57～61）も確認されている。



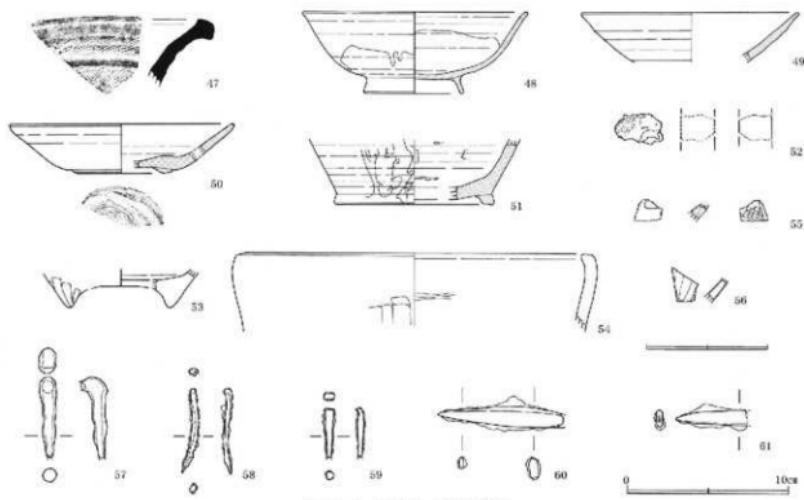
第34図 遺構外出土遺物(1)

遺構外遺物の出土状況をみると、縄文時代の遺物はⅠ区からの出土ではなく、ほとんどがⅡ区から出土している。平安時代以降の遺物ではいくつかの地点から遺物がまとめて出土している状況が窺える。

1つはⅠ区東側のB2杭付近を中心にB1杭にひろがる部分で、特にB2杭付近からは土師器壺(23)や灰釉陶器の碗(48)などがみつかっている。その他に表土層内からも遺物が多く出土しており、搅乱が著しく遺構等は確認されなかった。2つはB4杭の北東、4・8号住居跡の北東側からB6杭より北、5号住居跡の北東～北西にかけて大きな搅乱があり、そこからも多数の遺物が出土している。3つは13号住居跡より東側のⅡ区の北東端部で、土師器壺(19～21)、壺類(41・42)などがみつかっており、その他にも遺物が多く出土している。



第35図 遺構外出土遺物(2)



第36図 遺構外出土遺物(3)

第15表 遺構外出土遺物観察表 (縄文時代)

遺物番号	部位	文様・調整	胎土・焼成	色調	備考	種別	団版
1	口縁部片文	半歳竹管文・円形刺突文・棒状浮雕	密(黒雲母)良	にぶい 橙色	前期前葉諸磧式期	34-1	-
2	胴部片	半歳竹管文	密(赤色粒子)良	暗茶褐色	前期前葉諸磧式期	34-2	-
3	胴部片	沈線文・陸帯文に刺突文	やや粗(白色粒子・雲母)良	にぶい 赤褐色	中期中葉	34-3	-
4	胴部片	沈線文	密良	暗赤褐色	中期中葉	34-4	-
5	口縁部片	沈線文	やや粗(黒雲母)良	にぶい 黄橙色	中期後葉	34-5	-
6	口縁部片	沈線文	やや粗(金雲母)良	にぶい 黄橙色	中期後葉	34-6	-
7	胴部片	沈線による文様	やや粗(白色粒子・雲母)良	にぶい 赤褐色	中期後葉	34-7	-
8	胴部片	沈線文	粗(白色粒子・金雲母)良	にぶい 黄白色	中期後葉	34-8	-
9	胴部片	磨消し縄文	やや粗(金雲母)良	にぶい 橙色	中期後葉	34-9	-
10	胴部片	沈線による文様 (縦・ハの字状文)	やや粗良	にぶい 小褐色	中期後葉	34-10	-
11	胴部片	沈線による文様 (縦・ハの字状文)	やや粗(赤色粒子・金雲母)良	にぶい 黄茶褐色	中期後葉	34-11	-

遺物番号	種別 器種	残存 (%)	部位	大きさ(cm)	文様・調整・技法	胎土	色調	備考	排図 図版
12	麗文土器 深鉢	-	胴部～底部	高(5.4) 底7.0	胴部一繩文	輪(白色粒子・ 小石・質母)良	褐色 茶褐色		34-12 -
13	麗文土器 深鉢	-	把手のみ	-	円形刺突文	やや粗(赤・白 色粒子)良	褐色		34-13 -

遺物番号	器種	状態	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考	排図 図版
14	石鏸	一部欠損	(1.8)	1.3	0.3	0.3	黒曜石		34-14 7
15	石鏸	完形	2.5	1.8	0.3	0.2	黒曜石		34-15 7
16	石鏸	完形	2.0	1.4	0.5	0.2	黒曜石		34-16 7
17	石鏸	一部欠損	(1.2)	1.5	0.3	0.2	黒曜石		34-17 7
18	磨石	半分欠	(6.0)	6.9	[3.0]	195	閃綠岩	敲き痕あり	34-18 7

第16表 遺構外出土遺物観察表 (平安時代)

遺物番号	種別 器種	残存 (%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	排図 図版
19	土師器 壺	50	口縁～ 底部	高3.9 口[11.8] 底4.6	外面一クロナダーヘラケズリ 内面一クロナダーヘラケズリ 底部一ヘラケズリ	密(赤・白色粒子 多)良	褐色		35-19 7
20	七師器 壺	95	口縁～ 底部	高4.0 口[13.8] 底4.6	外面一クロナダーヘラケズリ 内面一クロナダーヘラケズリ 底部一ヘラケズリ	密(赤色粒子 多)良	赤褐色		35-20 7
21	土師器 壺	45	口縁～ 底部	高4.7 口[16.4] 底6.0	外面一クロナダーヘラケズリ 内面一クロナダーヘラケズリ 底部一ヘラケズリ	密(赤色粒子 多)良	褐色 黒色	黒色土器	35-21 -
22	土師器 壺	25	口縁～ 底部	高3.8 口[15.8] 底5.8	外面一クロナダーヘラケズリ 内面一クロナダーヘラケズリ 底部一ヘラケズリ	密(赤色粒子 多)良	黄褐色	全体的に磨耗している	35-22 -
23	土師器 壺	30	口縁～ 底部	高3.5 口[11.8] 底5.6	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子 多)良	黄褐色		35-23 -
24	土師器 壺	75	口縁～ 底部	高4.0 口12.3 底6.0	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一回転糸切り	密(赤・白色粒子 多)良	赤褐色		35-24 7
25	土師器 壺	50	口縁～ 底部	高3.8 口[12.4] 底6.2	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子 多)良	褐色 黒色	黒色土器	35-25 -
26	土師器 壺	60	口縁～ 底部	高4.2 口[12.6] 底5.4	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子 少・質母微)良	にぶい 褐色		35-26 7
27	土師器 壺	100	完形	高3.8 口11.2 底4.6	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一回転糸切り	密(質母多・赤 色粒子微)良	にぶい 黄褐色		35-27 7
28	土師器 壺	98	ほぼ 完形	高6.8 口18.2 底8.1	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一回転糸切り	密(白色粒子 多・黒墨)良	赤褐色	全体的に磨耗している	35-28 7
29	土師器 壺	70	口縁～ 底部	高3.9 口13.0 底5.8	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子 良)	褐色 黄褐色		35-29 7
30	土師器 壺	60	口縁～ 底部	高5.0 口15.4 底7.1	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一ヘラケズリ	密(赤・白色粒 子少)良	褐色		35-30 7
31	土師器 皿	50	口縁～ 底部	高2.4 口12.4 底3.5	外面一クロナダーヘラケズリ 内面一クロナダーヘラケズリ	密(赤・白色粒 子多)良	にぶい 褐色		35-31 7
32	土師器 皿	60	口縁～ 底部	高2.0 口12.3 底6.2	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 質母)良	黄褐色		35-32 -
33	土師器 皿	15	口縁～ 底部	高2.0 口[10.0] 底[6.2]	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一回転糸切り	密(質母・赤 色粒子微)良	明赤褐色		35-33 -
34	土師器 皿	45	口縁～ 底部	高1.8 口[11.6] 底[6.2]	内外面一クロナダーヘラケズリ 底部一回転糸切り	密(赤色粒子・ 質母微)良	黄褐色		35-34 -

35	土師器皿	70	口縁～底部	高 2.1 口 [10.6] 底 5.0	内外面一ロクロナデ	密(赤色粒子) 良	黄白色	底部中央穿孔あり	35-35 -
36	土師器 高台付环	-	高台部 のみ	高 ( 2.3 ) 底 [ 6.4 ]	内外面一ロクロナデ	密(赤・白色粒子微) 良	黄褐色	貼り付け高台	35-36 -
37	土師器 柱状 高台环	-	高台部 のみ	高 ( 2.2 ) 底 [ 7.0 ]	内外面一ロクロナデ	密(雲母・赤色 粒子微) 良	褐色 暗褐色	黒色土器 貼り付け高台	35-37 -
38	土師器 柱状 高台环	-	高台部 のみ	高 ( 2.3 ) 底 [ 5.2 ]	内外面一ロクロナデ	密(白・赤色粒子) 良	橙色		35-38 -
39	土師器 柱状 高台环	-	高台部 のみ	高 ( 2.5 ) 底 [ 4.8 ]	内外面一ロクロナデ	密(白色粒子 多・赤色粒子) 良	黄褐色	环部中央に穴あり 底部の糸切り痕不明瞭	35-39
40	土師器 柱状 高台环	-	高台部 のみ	高 ( 2.0 ) 底 [ 8.0 ]	内外面一ロクロナデ 底部一回転糸切り	やや粗(白色 粒子多) 良	赤褐色	全体にスス付着	35-40 7
41	土師器 小型隻	-	口縁部 片	高 ( 6.5 ) 口 [ 17.0 ]	外面一ハケ 内面一ハケ・指揮さえ	やや粗(白色 粒子・雲母多) 良	暗茶褐色		35-41 -
42	土師器 隻	-	口縁部 片	高 ( 6.7 ) 口 [ 30.0 ]	外面一ハケ・ナデ	やや粗(白色 粒子・雲母多) 良	暗茶褐色		35-42 -
43	土師器 羽釜	-	口縁部 片	高 ( 8.0 ) 口 [ 28.0 ]	外面一ハケ・ナデ 内面一ハケ・ナデ・指揮さえ	密(白色粒子 多・赤色粒子 微) 良	暗茶褐色		35-43 -
44	土師器 置き カマド	-	II 縁部 片	高 ( 10.0 ) 口 [ 26.8 ]	外面一ハケ・ナデ	やや粗(白色 粒子・金雲母 多) 良	暗褐色		35-44 7
45	土師器 置き カマド	-	底部片	-	内面一ハケ・ナデ	やや粗(白色 粒子・金雲母 微) 良	赤褐色		35-45 7
46	須恵器 短頸甕	-	II 縁部 片	高 ( 3.0 ) 口 [ 23.6 ]	外面一ロクロ整形	緻密 良	青灰色		35-46 -
47	須恵器 甕	-	口縁部 片	-	外面一ロクロ整形、櫛編波状文 内面一ロクロ整形	緻密 良	灰白色		36-47 -
48	灰釉陶器 碗	70	口縁～ 底部	高 6.8 口 18.2 底 8.0	外面一ロクロ整形	緻密 良	灰白色	外面上に輪付着	36-48 7
49	灰釉陶器 碗	-	II 縁部 片	高 ( 4.2 ) 口 [ 18.0 ]	外面一ロクロ整形	緻密 良	暗灰白色	外面上に輪付着	36-49 -
50	灰釉陶器 皿	20	II 縁部 底部	高 4.1 口 [ 18.4 ] 底 [ 8.2 ]	外面一ロクロ整形	やや粗 良	灰白色	貼り付け高台	36-50 -
51	灰釉陶器 甕	-	底部片	高 ( 5.4 ) 底 [ 13.0 ]	外面一ロクロ整形	緻密 良	青灰色	外面上に輪付着 貼り付け高台	36-51 -
52	土製品 吹子	-	剥口片	-	外面が黒く変色し、一部焼けて 気泡ができる跡あり	密(白・赤色粒子 多) 良	黑色 褐色		36-52 -

第17表 遺構出土遺物観察表（中世）

遺物 番号	種別 器種	残存 (%)	部位	大きさ(cm)	形態・整形・技法	胎土	色調	備考	博物 館版
53	瓦質上器 香炉	-	底部片	高 ( 1.5 ) 口 [ 8.4 ]	外面一ロクロナデ・ハラケズリ 内面一ロクロナデ	密 良	黒灰色 黒褐色	一足香炉と思われる	36-53 7
54	内耳土器	-	口縁部 片	高 ( 6.0 ) 口 [ 29.2 ]	外面一ハラナデ 内面一ナデ	密(赤・白色粒子) 良	黑褐色		36-54 7
55	灰釉陶器 鉢皿	-	胴部片	-	外面一ロクロ整形 内面一凹目	緻密 良	灰白色	中世(14~15世紀代)	36-55 7
56	青磁 碗	--	胴部片	-	織ぎ透井	緻密 良	青綠色	中世(13~14世紀代)	36-56 7

第18表 遺構外出土遺物観察表（鉄製品）

遺物番号	種類	出土位置	状態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	掲載回数
57	釘	一括	一部欠	(5.0)	1.0	0.8	6		36-57 -
58	釘	一括	ほぼ完形	5.3	0.5	0.5	4	先端部が少し焼けている	36-58 -
59	釘	一括	一部欠	(3.0)	0.6	0.5	2		36-59 -
60	棒状鉄製品	一括	ほぼ完形	(7.7)	1.3	0.5	15		36-60 -
61	棒状鉄製品	一括	一部欠	(4.5)	1.0	0.4	8		36-61 -

## 第V章 まとめ

今回は町道57号線の建設工事にともない約600mを対象に調査を行った。調査地域はもともと傾斜面上の地形にあり、畑をつくる際に、傾斜面上部の土を削って下に積むことにより各段の平坦面をつくって、ヒナ段上に整地していた。そのため、耕作土直下に遺構の確認面をもつものがほとんどで、遺物は出土しているが、遺構の確認が難しいものが多いなど、遺存状態は必ずしも良好な状態ではなかった。

そのような中、縄文時代の上坑1基、平安時代の住居跡10軒、土坑2基、時期不明の上坑2基、溝状遺構1条などの遺構が検出された。遺物では縄文土器・土師器などの土器類をはじめ、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、中世の瓦質土器（香炉・内耳鍋）、灰釉陶器片、青磁片、石器（磨石・砥石・石鐵）、鉄製品関係の遺物（釘・鉄津・吹子の羽口）などが出土している。

**遺構の時期** 縄文時代では上坑が1基確認され、そこから遺物が数点出土し、遺構外からも前期中葉・中期中葉～後葉の土器が十数点出土している。また、石塚などの石器類も確認されている。

平安時代では住居跡10軒（2・3・4・5・6・7・8・10・11・13号住居跡）、詳細不明の平安時代のものと思われる上坑2基（1・4号土坑）が確認されている。遺構の所属時期は以下のとおりである。

10世紀前半	・・・ 10号住居跡、11号住居跡
10世紀中頃	・・・ 2号住居跡
10世紀後半（第3四半世紀）	・・・ 3号住居跡、4号住居跡、5号住居跡、13号住居跡
10世紀後半（第4四半世紀）	・・・ 6号住居跡、8号住居跡
10世紀末～11世紀初	・・・ 7号住居跡

このうち、2号住居跡は10世紀後半の遺物も出土しているが、全体的にそれより古い様相を呈している遺物がみられる事と遺構の切り合い関係などから時期を10世紀中頃とした。

3号住居跡は遺物の数も少なく遺物では細分できなかったが、一部を10世紀第4四半世紀の6号住居跡に切られ、10世紀中頃の2号住居跡を切ってつくられていたため、10世紀第3四半世紀の遺構とした。

13号住居跡は擾乱が著しく、遺構を確認する際もカマドの焼土らしき跡しか確認できず、床面・立ち上がりとともに不明な状態であったが、時期的にまとまった遺物が多数出土したことから、遺物の状態から10世紀後半第3四半世紀の住居跡とした。

このように今回発掘された地点では10世紀前半に集落がつくられ、その後途切れることなく10世紀末～11世紀初まで継続する状態がみられる比較的短い期間の集落であった。

分布をみると10世紀前半の住居跡はII区の西側に位置しており、それより東側からI区にかけては確認されていないことから、西側の標高が低い部分に分布している可能性が高い。その後10世紀中頃以降の住居跡は13号住居跡から東側にあたる主にI区の西側から多数確認されているため、I区を中心としたそれより東側の標高の高い部分に多く分布している可能性が考えられる。

中でも1区西側では住居跡が重なり合って確認され、時期的に10世紀中頃～11世紀初までの間にさらに住居跡が四時期に細分されるといった状態がみられるなど、短期間に高密度の分布が確認できる。

**出土遺物について** 土器は主に坏類の中に磨耗しているものが多く、口縁部が歪んでいるために左右に高低差がみられるものや、器壁が同時期のものに比べて極めて厚いもの、口縁部が橢円形に拉げているものなどが多くみられ、町内の他の遺跡に比べて土器のつくり方としては粗雑な品を用いている傾向がみられる。灰釉・綠釉陶器は十数点出土しているが、中でも2号住居跡から出土した段皿や6号住居跡の耳皿など質の良い資料が出土している。置きカマドの破片は5点ほど出土し、主に10世紀代を中心としたものだが、町内の遺跡と比べて比較的よく出土している。灯明皿として使われた坏や底に墨がこびり付いた状態の墨溜め用に用いられた坏などが数点出土したが、今回の調査では墨書土器は全く出土しておらず、それらとの関係には不明な点がある。中世の遺物が数点出土しており、中には13～14世紀代にあたる青磁の碗の破片や、他に14～15世紀代と思われる灰釉陶器の卸皿の破片なども出土している。同時期の遺構は確認されていないが、平安時代以降にもこの周辺に人々が生活していた事が窺われ、今後それらの生活跡が確認される可能性がある。

**条里制について** 町史によると『米倉字大仏塚の浅川左岸に「屯田跡」、米倉字金山に「屯倉跡」とよばれる地域がある。屯田とは大化の改新以前の皇室直轄領で、この皇室直轄領には山会の管理のもとに農民に耕作させる直接経営のものと、国造らの支配の一部にあてるものとがあったが、屯田は前者をさすものといわれ、特に地域的には畿内及びその周辺に限られるといわれてきた……律令制で全国に施工された条里制や戸籍がまず屯倉内部で行われ、朝廷の経済力を増大させた』との記述がみられ、本遺跡合めた周辺の浅川左岸において古い時期から条里制構造と何らかの関係があったものと思われる。分布調査でも本遺跡付近に米谷C条里制構造として確認されている条里制地割があるが、条里制構造そのものや、時期的な問題などに不明な点が多く、今のところ具体的な資料が確認されていないなど詳細は不明である。

本町での平安時代の遺跡分布は一般的に後半期になるとその数を増やしつつ、盆地全域にわたって遺跡が拡散しながら山間部にまで広く分布するようになる。本遺跡もこれまであまり集落が確認されていない浅川左岸にあるまさにその時期に広がった集落の一つであると思われる。また、条里制構造とも隣接して存在していたと考えると、浅川左岸地域は生産基盤である水田跡の拡大に伴いその周辺に平安時代の集落がつくられていったのではないかと思われる。

現段階では調査成果が少ないため、あくまでも現状での情報をもとにまとめに過ぎない。今後周辺の調査が進展すれば、各時代における集落の構造や分布状態、その時期的な消長関係について徐々に明らかになっていくものと思われる。

参考文献	八代町	
八代町教育委員会	1975『八代町誌』（上巻）	
	1984『五里原遺跡発掘調査概要』	
	1985『上の平遺跡』	
	1987『三光神遺跡』	
	1990『遺跡詳細分布調査報告書』・『駿河遺跡』	
	1996『堀之内遺跡』	
	1997『平成8年度町内遺跡発掘調査報告書』	
	2003『金地藏遺跡』・『四反田遺跡・東小山B遺跡・東小山C遺跡』	
	2004『下長崎遺跡』・『五里原遺跡』	
山梨県教育委員会	1989『下長崎遺跡・河の木神社遺跡』	
	1991『山梨県史』資料編1原始・古代1考古（遺跡編）	
	『山梨県史』資料編2原始・古代2考古（遺構・遺物編）	

図 版

図版 1



1. 遺跡全景（南より）



2. 調査区全景



3. 3号住居跡



4. 4号住居跡

図版 2



1. 5号住居跡



2. 5号住居跡カマド(1)



3. 5号住居跡カマド(2)



4. 6号住居跡



5. 6号住居跡カマド



6. 7号住居跡



7. 7号住居跡カマド



8. 7号住居跡カマド断面

图版 3



1. 7号住居跡遺物出土状態(1)



2. 7号住居跡遺物出土状態(2)



3. 8号住居跡



4. 8号住居跡カマド



5. 10号住居跡



6. 10号住居跡遺物出土状態



7. 11号住居跡

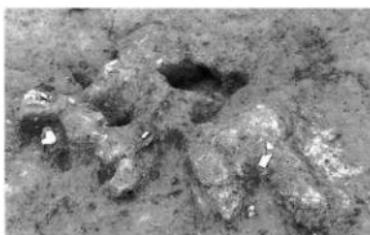


8. 11号住居跡カマド

図版 4



1. 13号住居跡



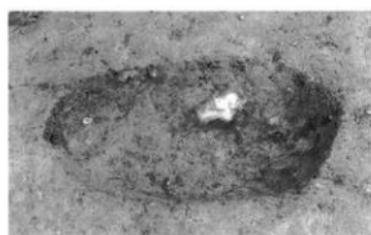
2. 13号住居跡カマド



3. 13号住居跡遺物出土状態



4. 1号土坑



5. 3号土坑



6. 4号土坑

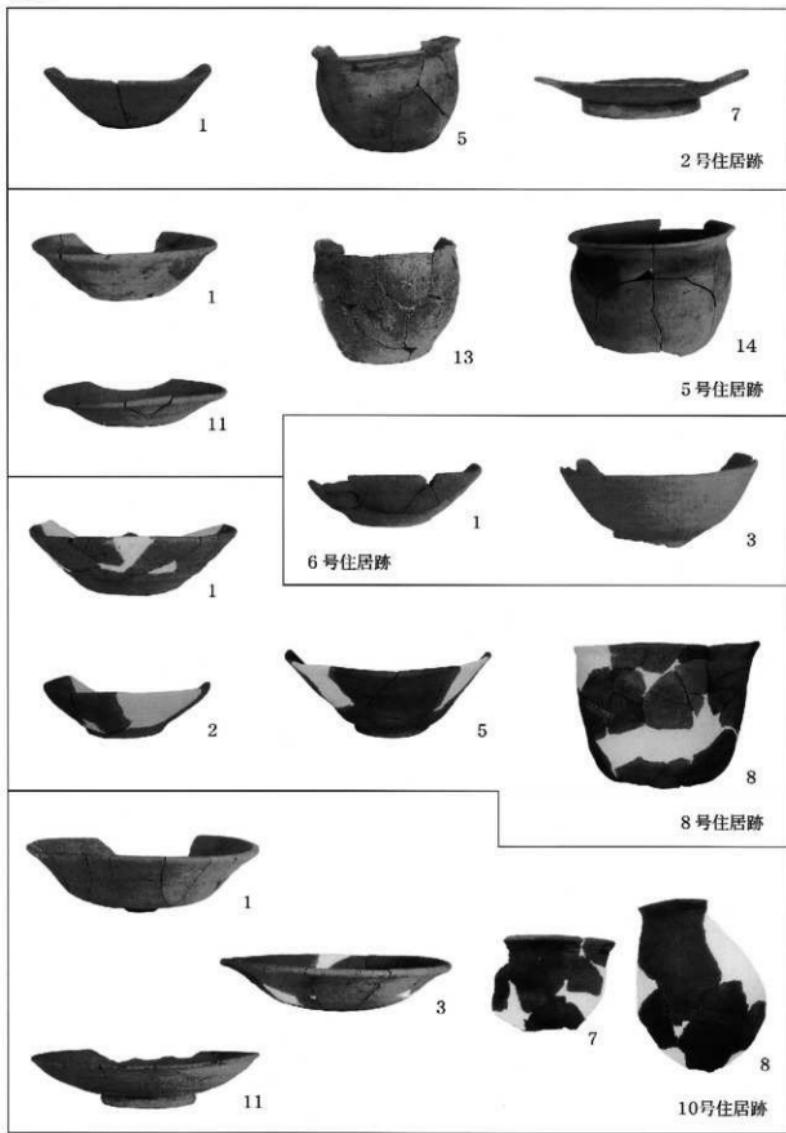


7. 1号溝状遺構



8. 調査風景

図版5



平安時代の遺物(1)

図版 6



平安時代の遺物(2)

図版7



## 報告書抄録

ふりがな	よながいせき						
書名	夜長遺跡						
副書名	笛吹市道八代57号線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1集						
著者名	小坂規恵						
編集機関	笛吹市教育委員会						
所在地	〒406 8555 山梨県笛吹市八代町南527 TEL 055- (265) -4862						
発行年月日	2005年3月31日						
ふりがなふりがな	コード	測地系			調査期間	面積面積	調査原因
所収遺跡名所在地	市町村	地番	北緯	東経			
夜長遺跡 よながいせき 山梨県笛吹市 やまなみけん ふえし 八代町末原 おだまち すえはら 字大仏原438-1他			35° 36' 18"	138° 38' 22"	20001004 ～20001227	約600m <sup>2</sup>	町道57号線建設工事に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
夜長遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 中世 時期不明	上坑 堅穴住居跡 土坑  土坑 構造遺構	上器・石器 土器・須恵器 灰釉陶器・綠釉陶器 上製品・石器 瓦質土器 灰釉陶器・青磁 鉄製品			

笛吹市文化財調査報告書 第1集

夜長遺跡

発行日 平成17年3月31日  
発行 笛吹市教育委員会  
印刷 稲村印刷社  
山梨県東八代郡石和町下半井1370

*Fuefuki City Cultural Preservation Series Vol.1*

The Report of  
Archaeological Research of YONAGA Site

Archaeological Rescue Survey before the Construction of  
City Highway "Yatsushiro No. 57"

2005

Fuefuki City Board of Education